茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第12集

鷹巣戸内遺跡

市道1418号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成25年３月

常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第12集

鷹巣戸内遺跡

市道1418号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成25年３月

常陸大宮市教育委員会

ごあいさつ

常陸大宮市は茨城県の北西部に位置し、県都水戸から約20ｋｍの、平成の大合併で誕生した人口約４万４千人の市です。

市域は、鷲子山塊の南端と関東平野周縁台地の北端の境界部にあたります。東部には久慈川、南西部には那珂川、中央部には緒川や玉川の清流が流れ、山間には美林が涵養されていて、まさに山紫水明の地となっております。また、河川の流域や台地上には肥沃な田畑が広がり、大きな農業生産力の基盤となっております。

こうした豊かな自然に恵まれた当市は、古くから人々の生活の場として永い歴史を重ねており、市域には各時期の集落跡をはじめ、古墳・城館跡・塚など多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は、私たちの祖先がどのように生活したのか、そして現在の豊かな生活の礎がいかに築かれてきたのかを知る手がかりになります。遺跡は、私たちが心豊かな生活をするうえで根源的かつ必要な情報を与えてくれていると言えましょう。

しかし、これら多くの遺跡を有しながらも、これまで当市では発掘調査はもっぱら民間の調査会社に委託せざるを得ない状況でした。将来にわたって当市の誇る貴重な文化遺産を保護し、活用していくためには、専門職員の確保など体制の整備が喫緊の課題であり、当市では数年をかけ体制の充実を図ってきた経緯があります。

そしてここにようやく機は熟し、初めて当教育委員会主体による発掘調査を実施し、報告書を刊行することができました。このたびの発掘調査は、市道1418号線改良工事に伴い、周知の遺跡である鷹巣戸内遺跡の記録保存を目的として実施したものです。平成23年10月から平成24年１月まで現地調査が行われ、その後平成25年３月まで整理作業が進められました。遺跡内からは平安時代から中世の遺構・遺物が確認されるという成果を得ることができ、鷹巣瓦窯跡群など周辺に所在する近い年代の遺跡と関連し、当市の歴史を考証するうえで貴重な資料となりました。

本書は、この発掘調査の成果を報告するものであります。歴史研究の学術資料としてはもとより、地域の教育・文化の向上のために十分に活用していただくことを希望いたします。また、この機会に文化財愛護の意識を一層高めていただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたりご指導いただきました茨城県教育庁文化課、全般にわたりご協力いただきました地元の皆様、その他ご指導・ご協力をいただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

平成25年３月

茨城県常陸大宮市教育委員会
教育長　　上久保　洋一

例　言

1　本書は、茨城県常陸大宮市鷹巣938番地の４ほかに所在する、鷹巣戸内（たかす　とうち）遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は市道1418号線改良事業に伴う事前調査で、常陸大宮市教育委員会が主体となって実施した。調査面積は690㎡である。

3　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

発掘調査　平成23年10月19日～平成24年１月11日

整理調査　平成24年１月12日～平成25年３月22日

4　発掘調査及び整理作業は以下の者が担当した。

主任調査員　後藤　俊一　（常陸大宮市教育委員会事務局生涯学習課）

調査員　　鴨志田　篤二（常陸大宮市教育委員会事務局生涯学習課）

（平成23年10月19日～平成24年３月31日）

調査員　　萩野谷　悟　（常陸大宮市教育委員会事務局生涯学習課）

（平成24年４月１日～平成25年３月22日）

5　本書の執筆・編集は、主任調査員後藤俊一が担当した。

6　発掘調査及び整理作業には、一般社団法人常陸大宮市シルバー人材センターの協力のもと以下の者が従事した。（敬称略、五十音順）

大曽根則雄、紀藤信、小泉陸郎、斎藤康子、佐藤幸治、鈴木淳子、寺門きぬゑ、寺門とみゑ、寺門博、樋田義雄、長山正夫、羽石英樹、藤田貞雄、山崎家子

7　出土遺物及び記録類は、常陸大宮市教育委員会において保管している。

8　発掘調査から本書の作成に至るまで、以下の方々から多大なるご教示・ご協力をいただいた。厚く御礼申し上げる。（敬称略、各五十音順）

糸川崇、小野瀬信雄、小野瀬ハヤ、柏亨、川崎純徳、後藤孝行、佐々木義則、藤田三男、細谷篤正、野上平、松本直人、渡辺明

一般社団法人常陸大宮市シルバー人材センター、茨城県教育委員会、株式会社瀧工務店、高長寺、鷹巣区、鷹巣子ども会

凡　例

1　調査にあたっては、面積が小さいため地区やグリッドの設定を行っていない。

2　本文・実測図・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構　SI―住居跡、SB―掘立柱建物跡、SK―土坑、P―柱穴、K―撹乱

遺物　DP―土製品、Q―石器・石製品

土層　K―撹乱

3　遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

（1）遺構全体図は300分の１、遺構の実測図は60分の１の縮尺で掲載することを基本とした。

（2）遺物は原則として３分の１の縮尺で掲載した。

（3）遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

焼土、須恵器　　竈材、黒色処理

煤・油煙、火床面

―・―・―・―・― 硬化面

4　遺物観察表の表記については以下のとおりである。

（1）推定値は（　）を付して示した。計測値の単位はcmで示した。

（2）備考欄は、残存率その他必要と思われる事項を記した。

5　土層と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社、1967年）を使用した。

6　「主軸」は、竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については、長軸（長径）を軸とみなした。「主軸・長軸（長径）方向」は、その主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例　N―10°―W）

7　遺構番号は調査開始にあたっての遺構確認作業で付したものを本報告書でも踏襲した。したがって調査の結果遺構でないと判断されたものについては欠番としている。

目　次

ごあいさつ …… 1
例言 …… 2
凡例 …… 3
目次 …… 4

第１章　調査経緯
　第１節　調査に至る経緯 …… 5
　第２節　調査の経過（日誌抄） …… 5
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　調査の成果
　第１節　遺跡の概要 …… 9
　第２節　基本層序 …… 9
　第３節　遺構と遺物 …… 11
　　１　平安時代の遺構と遺物
　　（１）竪穴住居跡 …… 11
　　（２）土坑 …… 22
　　（３）遺構外出土遺物 …… 25
　　２　中世の遺構
　　（１）掘立柱建物跡 …… 26
　　３　その他の遺構
　　（１）土坑 …… 27
第４章　まとめ …… 28

引用・参考文献 …… 29
報告書抄録 …… 30
写真図版 …… 31

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、市道1418号線改良事業による工事に伴う、鷹巣戸内遺跡の記録保存を目的とする調査である。

平成22年３月12日付常大都建第176号にて常陸大宮市長　三次　真一郎より、常陸大宮市教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無が照会された。事業内容は未舗装の市道の改良工事であり、事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地　鷹巣戸内遺跡（大034）内に所在していた。

このため、常陸大宮市教育委員会は同年６月10日及び７月22日に、事業予定地の試掘調査を実施した。試掘調査はトレンチ方式で行われ、事業予定地内に４か所のトレンチを設定した。区域北部に設定した№１から№３までの３つのトレンチではいずれも撹乱が著しく、一部で地下水が湧き出すなどしたため、遺跡の所在は確認できなかった。しかし区域南部に設定した№４トレンチでは地表面から20㎝ほどで明確なローム上面が確認でき、また竪穴住居跡や土師器（坏）等が確認されたことにより、古代の集落跡であることが判明した。なお№４トレンチ以南は耕作がされていたためトレンチを設定することはできなかったものの、地表面に土師器片が散見された。これらの結果について、照会者あてに同年９月29日付常大教生第74号にて回答したところ、事業実施の意向は変わらなかった。

平成23年３月２日付常大都建第109号にて常陸大宮市長　三次　真一郎より、文化財保護法第94条第１項による埋蔵文化財発掘の通知が提出され、試掘調査結果を受けた茨城県教育委員会との協議により、事業区域の南半分のみ記録保存目的の発掘調査が相当と判断された。

本調査については常陸大宮市教育委員会が同年10月19日から平成24年１月11日にかけて実施した。なお平成23年10月19日付常大教生第103号にて文化財保護法第99条第１項による埋蔵文化財発掘調査の報告を提出している。

第２節　調査の経過（日誌抄）

本遺跡の発掘調査は平成23年10月19日から平成24年１月11日の約３か月間にわたって実施している。

調査に先立ち、10月４日に調査区域の除草を実施し、10月18日に現地へ発掘機材を搬入した。なお現場事務所としては鷹巣区の協力により、近くにある鷹巣区コミュニティセンターを借用した。

10月19日に重機により表土除去を開始した。調査区域内には水道管が敷設されているため、一部手掘りを併用する等確認しながらの慎重な作業を余儀なくされた。このため重機での作業を完了したのは10月24日になった。

除去後、ジョレン掛けを行い遺構確認に努めたが、撹乱が多く、重複遺構も多いため正確な遺構数はこの時点ではつかめなかった。このため遺構の可能性のあるものには一旦遺構番号を付し、サブトレンチを入れながら確認、並行して平面を４分割ないし２分割し、掘削後埋積土の観察、記録を行うことにより遺構の確認を行っている。この作業により、遺構番号が付されたものの、後に撹乱または異なる種別の遺構と判断されたために欠番となった遺構番号が多く発生している。特に土坑は43まで番号を付したが、そのほとんどが近現代の耕作痕またはゴミ穴の類と判断し、本書では取り上げていない。

遺構の完掘後は平面図の作成（縮尺1／20）及び写真撮影を行った。遺構平面図は平板測量にて現地で作図した。竪穴建物跡はその掘り方まで掘削し、平面と同様の記録を取った。

本調査中、教育委員会事業の関係等で調査を中断することがしばしばあったものの、12月21日に茨城県教育庁文化課の終了確認を受け、12月27日には補足調査を含むすべての調査・記録を完了している。

この間、12月26日に現地説明会を実施し、地元住民等40名が参集した。

発掘機材は12月26日から28日にかけて撤収し、重機を使用した埋め戻しを12月28日から平成24年１月11日まで実施し、現地作業を完了した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境（第１図）

鷹巣戸内遺跡は、茨城県常陸大宮市鷹巣938番地の４ほかに所在する。

常陸大宮市は茨城県の北西部に位置し、北は大子町、東は常陸太田市、南は那珂市・城里町、西は栃木県那珂川町・那須烏山市・茂木町と接している。常陸大宮市の市街地は市の南東に位置し、ＪＲ水郡線、国道118号が南北に通り、また水戸市から城里町を抜けて栃木県茂木町に至る国道123号は市の西方を南東―北西方向に走っている。

市の地形は八溝山系の尺丈山（511m）を最高峰とし、この付近から南東方向に傾斜する山地が南東方の瓜連台地へと続いている。この山地の東側に久慈川、西側に那珂川が流れ、両河川に流れ込む支流が山間地に支谷を形成している。この両水系には河岸段丘が発達し、下流には若干の低地も認められる。市内の遺跡の多くはこの河岸段丘から低地にかけて立地している。

本遺跡は久慈川の右岸河岸段丘上、標高33～34mに立地する。遺跡の東側を水戸藩三大江堰のひとつである岩崎江堰の用水路が南流し、その東側に広がる沖積低地にある水田等を挟んでさらに東側を久慈川が南流し約20km下流で太平洋に注いでいる。本遺跡の所在する段丘面上は南北に国道118号が縦貫し、周囲に農村集落が形成されている。本遺跡から、これらを挟んで西側には標高50～60mほどの八溝山系のなだらかな山地が広がっている。

第２節　歴史的環境（第１図、第１表）

常陸大宮市には、総数317か所（大宮地域145か所、山方地域20か所、美和地域37か所、緒川地域18か所、御前山地域97か所）の埋蔵文化財が周知されている。遺跡は久慈川・那珂川の両水系によって形成された河岸段丘から低地にかけて広く分布し、山間地への分布は比較的少ない。旧石器から近世に至る多様な遺跡が所在しており、以下各時代の主な遺跡をもって概要を説明する。

旧石器時代では市内に５か所の遺跡が周知されており、すべて久慈川・那珂川いずれかの河岸段丘上に立地している。遺物としては、山方遺跡で昭和39年に茨城県内初となる旧石器が発見され、この時出土した石核２点は、約28,000～30,000年前のものと推定され、現時点において市内最古の遺物である。また梶巾遺跡【10】で槍先形尖頭器が出土し、小野天神前遺跡からは細石核が採集されているほか、西塙遺跡（平成20～21年度調査）や上ノ宿遺跡【46】（平成20年度調査）でも剥片が確認されており、当市域の旧石器研究は新たな広がりを見せつつある。

縄文時代は、時代別としては奈良・平安時代に次いで多く遺跡が所在している。岡原遺跡（平成22年度調査）で縄文時代早期（田戸下層式）の竪穴住居跡を１軒確認している。西塙遺跡では有段竪穴４軒や土坑378基等が、高ノ倉遺跡（平成16年度調査）では土坑223基が確認されるなど、中期の大規模集落が那珂川左岸の段丘上に所在していることが特徴的といえる。このほか梶巾遺跡【10】、諏訪台遺跡【14】、上ノ宿遺跡【46】など久慈川右岸の段丘上でも集落跡が確認されている。特筆されるのは、久慈川の支流玉川の左岸段丘上標高47.5m～50mに約75,000㎡にわたり広がる坪井上遺跡である。坪井上遺跡は平成５年度と平成８年度の２度にわたり調査が行われ、竪穴住居跡19軒のほか、袋状土坑だけで75基が確認されるという中期の大集落跡であるが、この調査時及びそれ以前の耕作時に出土したもの合わせて１遺跡から８個の硬玉製大珠が出土していることで特に知られている。これらの大珠は新潟県糸魚川市の姫川流域で産出される翡翠製であり、火炎系土器をはじめ阿玉台式・加曽利Ｅ式・大木8a式など多様な土器が出土したことに加え、遺跡下を流れる玉川は常陸国風土記にも記載があるように瑪瑙を産出することが古くから知られていることなどから、この集落は関東・東北・北陸の文化が交差する、中期における茨城県北部地域の一大交流拠点であったと考えられている。

弥生時代としては、上岩瀬富士山遺跡（平成16年度調査）で竪穴住居跡７軒、富士山遺跡でも竪穴住居跡９軒が確認されるなど、後期後半十王台式期の遺跡が所在している。しかし特に知られているのは中期の小野天神前遺跡と泉坂下遺跡であろう。ともに再葬墓遺構が確認されており、那珂川左岸の段丘上に所在する小野天神前遺跡では１遺跡から３点の人面付壷形土器が出土し、久慈川

第１図　鷹巣戸内遺跡周辺遺跡分布図
（Ｓ＝１：50,000）

第１表　鷹巣戸内遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
1	鷹巣戸内遺跡	集落跡	○				○		
2	堀の内遺跡	集落跡					○		
3	東原遺跡	集落跡		○			○		
4	原坪遺跡	集落跡					○		
5	中丸遺跡	集落跡		○			○		
6	向山遺跡	集落跡		○			○		
7	西沢遺跡	集落跡		○			○		
8	宿東遺跡	集落跡			○	○	○		
9	馬場先遺跡	集落跡		○		○	○		
10	梶巾遺跡	集落跡	○	○	○		○		
11	京塚遺跡	集落跡			○		○		
12	糠塚古墳群	古墳群				○			
13	糠塚遺跡	集落跡			○		○		
14	諏訪台遺跡	集落跡		○					
15	諏訪下遺跡	集落跡		○					
16	鷹巣古墳群	古墳群				○			
17	上坪遺跡	集落跡	○	○			○		
18	大阪平B遺跡	集落跡					○		
19	大阪平A遺跡	集落跡					○		
20	河井台遺跡	集落跡					○		
21	鷹巣原B遺跡	集落跡					○	○	
22	犬追遺跡	集落跡		○					
23	雷神山横穴群	横穴群				○			
24	田子内遺跡	集落跡					○		
25	鷹巣原遺跡	集落跡		○			○		
26	鷹巣瓦窯跡群	瓦窯跡					○		
27	姥賀遺跡	集落跡		○			○		
28	堰ノ上遺跡	集落跡					○		
29	八田桑原遺跡	集落跡					○		
30	八田向原遺跡	集落跡						○	
31	北平遺跡	集落跡		○		○	○		
32	関平遺跡	集落跡		○		○	○		
33	前坪遺跡	集落跡				○	○		
34	前坪東遺跡	集落跡		○					○
35	岩欠横穴墓群	横穴群				○			
36	冨士権現古墳群	古墳群				○			
37	冨士山遺跡	集落跡		○					
38	抽ヶ台遺跡	集落跡				○	○		
39	抽ヶ台古墳	古墳				○			
40	見渡遺跡	集落跡					○	○	
41	中富遺跡	集落跡		○			○		
42	部垂城跡	城館跡						○	
43	松吟寺遺跡	集落跡		○			○	○	
44	松吟寺古墳群	古墳群				○			
45	宮中遺跡	集落跡		○			○		
46	上ノ宿遺跡	集落跡		○			○	○	
47	姥賀東遺跡	集落跡				○	○		
48	高渡遺跡	集落跡		○			○		
49	台坪遺跡	集落跡					○		
50	石幸遺跡	集落跡					○		
51	山根遺跡	集落跡	時期不明						
52	富岡七ツ塚群	塚群							○

右岸の低位段丘面に所在する泉坂下遺跡では国内最大の人面付壷形土器が出土するという、いずれも稀有な例として名を轟かせている。また泉坂下遺跡はその保存状態の良さが特に評価されており、今後の再葬墓研究の鍵を握るとまで言われている存在である。

古墳時代の集落遺跡としては、梶巾遺跡【10】から前・中期の竪穴住居跡４軒、下村田遺跡から後期の竪穴住居跡７軒が確認されている。また古墳については、富士山古墳群に出現期古墳として考えられている前方後方墳、富士山４号墳があり、茨城県内でも最も古い古墳の一つと考えられている。中期の古墳として、同じく富士山古墳群の全長60ｍの前方後円墳、五所皇神社裏古墳、全長90ｍの前方後円墳、糠塚古墳が所在する。後期の古墳としては、一騎山古墳群がある。10基の古墳からなり、４号墳は６世紀後半の小規模な前方後円墳で、人物・動物等の形象埴輪や円筒埴輪が出土している。このほか岩崎古墳群、鷹巣古墳群【16】、糠塚古墳群【12】、富士山古墳群などがあり、これらのほとんどは久慈川右岸またはその支流玉川両岸の段丘上に所在するが、岩崎古墳群及び富士山古墳群の丸山古墳は低位段丘面上に所在しており、これは茨城県北部では外に例がない。また赤岩遺跡（平成23年度調査）で直径16.5ｍの円墳が発見され、当市域の那珂川左岸段丘上では初の古墳調査の事例となった。さらに玉川左岸には雷神山横穴群と岩欠横穴墓群といった横穴墓も所在している。

奈良・平安時代の遺跡は時代別としては最も多く市内に所在し、調査例も多い。県内有数の大規模集落として知られるのは、久慈川右岸の標高55ｍの段丘上に位置する上ノ宿遺跡【46】である。平成18年度と平成20年度の２度の調査で、合わせて118軒の竪穴住居跡が確認され、風字硯や耳皿２点（土師器と灰釉陶器のものが１点ずつ同一の住居跡から出土）などの特殊な遺物が出土しているため、この地域の拠点的集落であったと考えられているが、これらの調査でも集落の限界は掴めておらず、さらに範囲が拡大していくことは確実視されている。一方、岡原遺跡では竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡１棟が確認され、「□□□鳥〔　〕」と書かれた多文字・人面墨書土器や「真岡」と書かれた朱墨書土器が出土しており、源氏平遺跡では19軒の竪穴住居跡、掘立柱建物跡１棟が確認され、底面に「土垣倉」と墨書され内側に漆紙文書「解」が付着した土師器坏や、「□□鳥取文功」、「□□鳥部嶋」が刻書された瓦が出土した。また「丈」の烙印が出土した上村田小中遺跡や「丈永私印」の銅印の出土した小野中道遺跡など、丈部氏関連と考えられる遺跡が所在している。

今回調査された鷹巣戸内遺跡【１】の所在する鷹巣地区の一部は、古代に横瀬郷と呼ばれた。横瀬郷の南西部の台地斜面には瓦窯が10基前後所在したと推定されており、この鷹巣瓦窯跡群【26】で製作された瓦は、常陸太田市薬谷町・大里町付近に所在した久慈郡衙の造営に用いられたと考えられている。鷹巣瓦窯跡群【26】に近接する鷹巣原遺跡【25】（鷹巣遺跡を含む）では、過去３度の調査が行われ、竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡２棟が確認されて布目瓦や竈に再利用された瓦などが出土しており、瓦の製作に従事した工人の集落跡と考えられている。

中世の遺跡としては、久慈川右岸の部垂城跡【42】、宇留野城跡、前小屋城跡、那珂川左岸の長倉城跡、野口城跡、小場城跡、玉川左岸の東野城跡などに代表される城館跡が市内各所に所在している。また三美では備蓄銭が計3,929枚出土している。すべて中国銭で、鋳造期間が判明した2,659枚のうちには乾元重寶などの唐銭、皇宋通寶などの宋銭、正隆元寶などの金銭、至大通寶などの元銭が含まれていたが、永楽通寶などの明銭が全体の13％を占めており、備蓄銭の埋納は織豊時代である。

近世の遺跡では、弁慶松塚群、岩花塚群、一の沢塚群などの塚や、前坪東遺跡【34】や仲ノ内遺跡などの集落跡が市内各所に広く所在している。なお岡原遺跡では「光堂」の字名が残る区域で土坑墓７基などが確認されたことなどにより、仏教関連施設を囲む墓域があったと考えられるとの報告がある。また特殊な遺跡として、生産遺跡である赤沢鉄山相川分工場跡、郷校跡である時雍館址などが挙げられる。

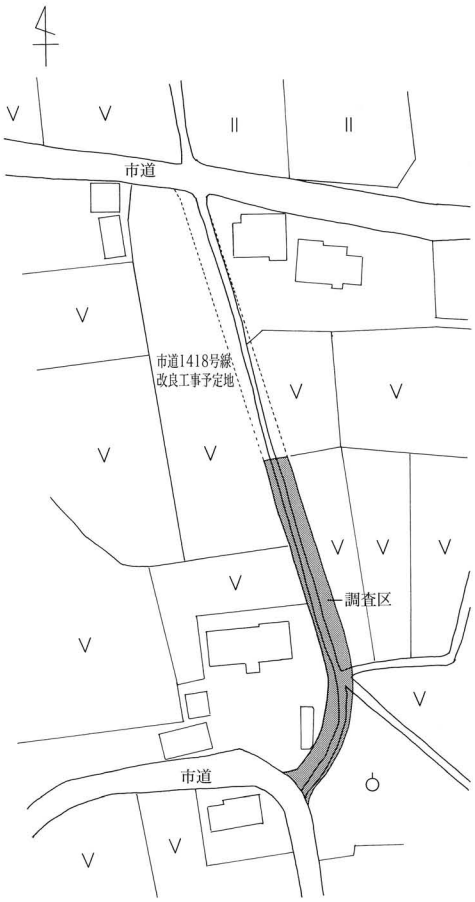
第３章　調査の成果

第１節　遺跡の概要（第２図）

鷹巣戸内遺跡は久慈川の右岸河岸段丘上標高33m～34mに所在し、調査面積は690㎡で旧石器、奈良・平安時代から中世の複合遺跡である。

今回の調査で確認された遺構は、平安時代の竪穴住居跡６軒、土坑１基、中世の掘立柱建物跡１棟、時期不明の土坑２基である。

遺物は収納コンテナ（内寸530㎜×356㎜×234㎜）で７箱ほど出土している。主な遺物は竪穴住居跡及び土坑から出土した土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土製品などである。



第２図　鷹巣戸内遺跡調査区設定図
（S＝1：1,500）

第２節　基本層序（第３図）

調査区中央部にテストピットを設定し、深さ1.8mまで掘り下げて基本層序の観察を行った。土層は10層に分層された。その観察結果は以下のとおりである。

第１層は暗褐色の耕作土層で、ローム粒子を微量含む。層厚は18～24㎝と比較的薄く、このため耕作の痕跡が第２層まで届いていることが確認できる。

第２層は橙色のソフトローム層でしまりは強い。層厚は30～42㎝である。遺構はこの層の上面で確認できたが、耕作による撹乱が多い。

第３層は黄橙色のソフトローム層で、ローム粒子を多量に含んでいる。層厚は40～65㎝である。

第４層はにぶい橙色のソフトローム層で、ローム粒子・砂粒を多量に含んでおり、しまりは強い。また鹿沼パミスのブロックを少量含み、鹿沼パミスの粒子を少量含んでいる。層厚は10～35㎝である。

第５層は橙色のソフトローム層で、砂粒を多量に含んでおり、しまりは強い。層厚は５～18㎝である。

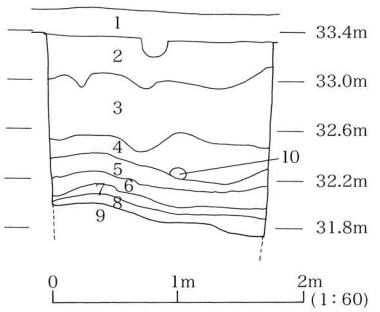
第６層は明褐色のハードローム層で、砂粒を少量含んでおり、しまりは強い。層厚は８～16㎝である。

第７層は明褐色のハードローム層で、砂粒を少量含んでおり、しまりは強い。層厚は５～８㎝である。

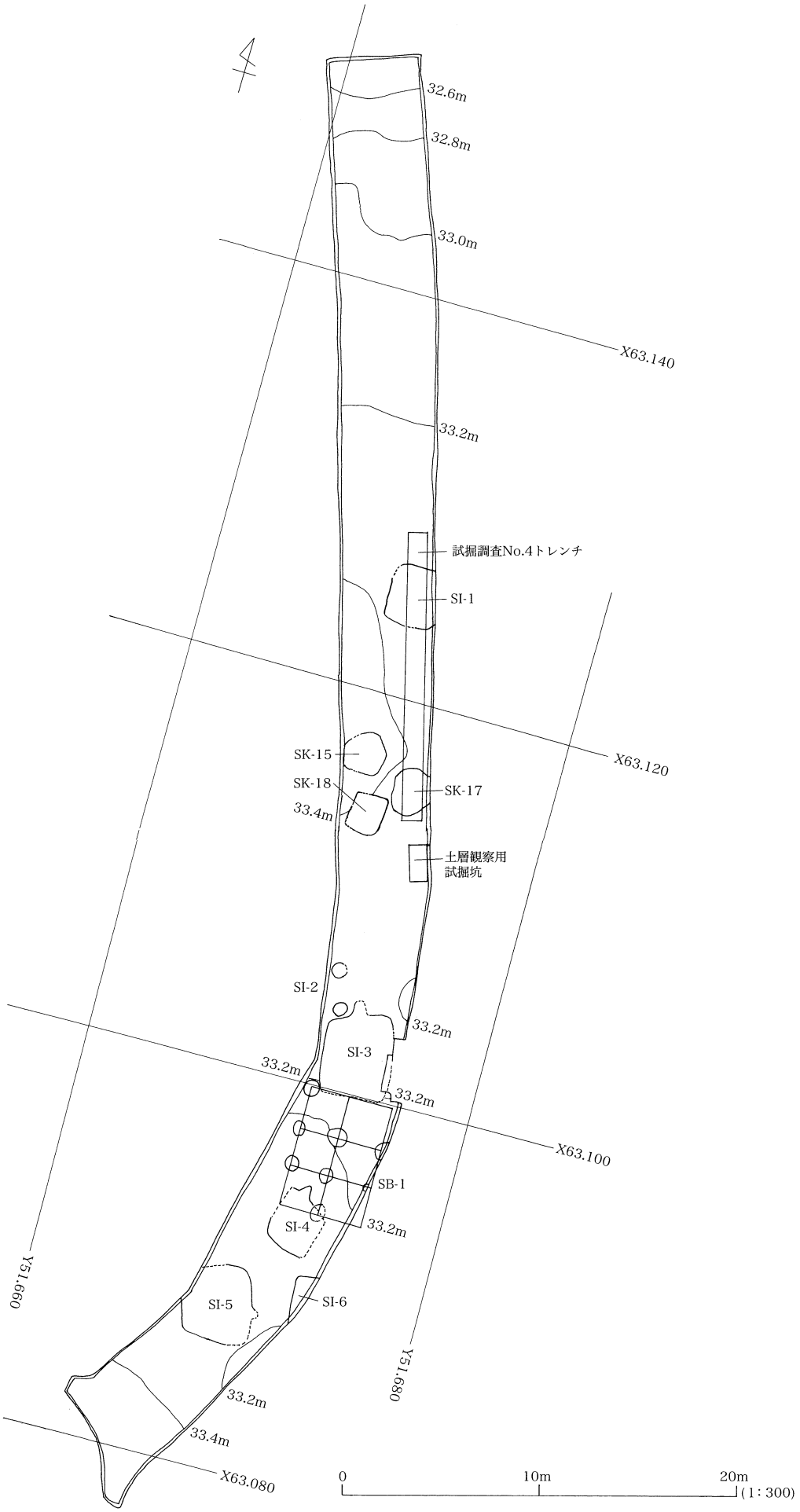
第８層は明褐色のハードローム層で、砂粒を少量含んでおり、しまりは強い。層厚は３～15㎝である。

第９層は褐色のハードローム層で、砂粒を少量含んでおり、しまりは強い。以下未掘のため層厚は不明である。

第10層は明褐色の鹿沼パミスのブロックで、しまりは弱い。



第３図　基本土層図



第４図　鷹巣戸内遺跡遺構全体図

第３節　遺構と遺物

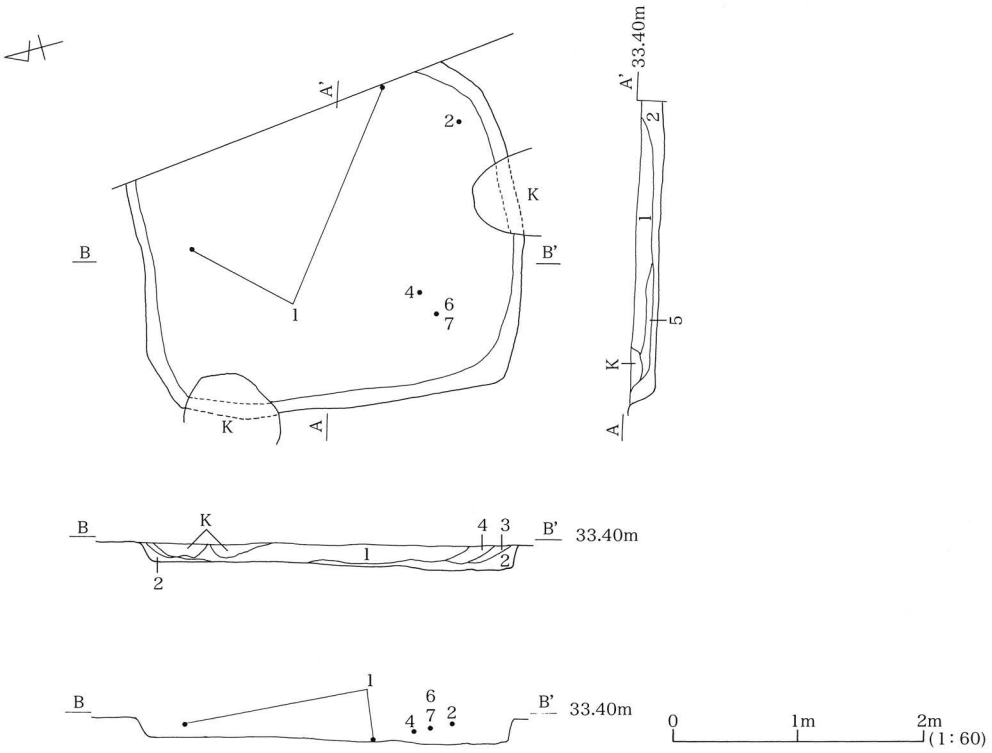
１　平安時代の遺構と遺物

竪穴住居跡６軒と土坑１基を確認した。以下、遺構の特徴について記述する。

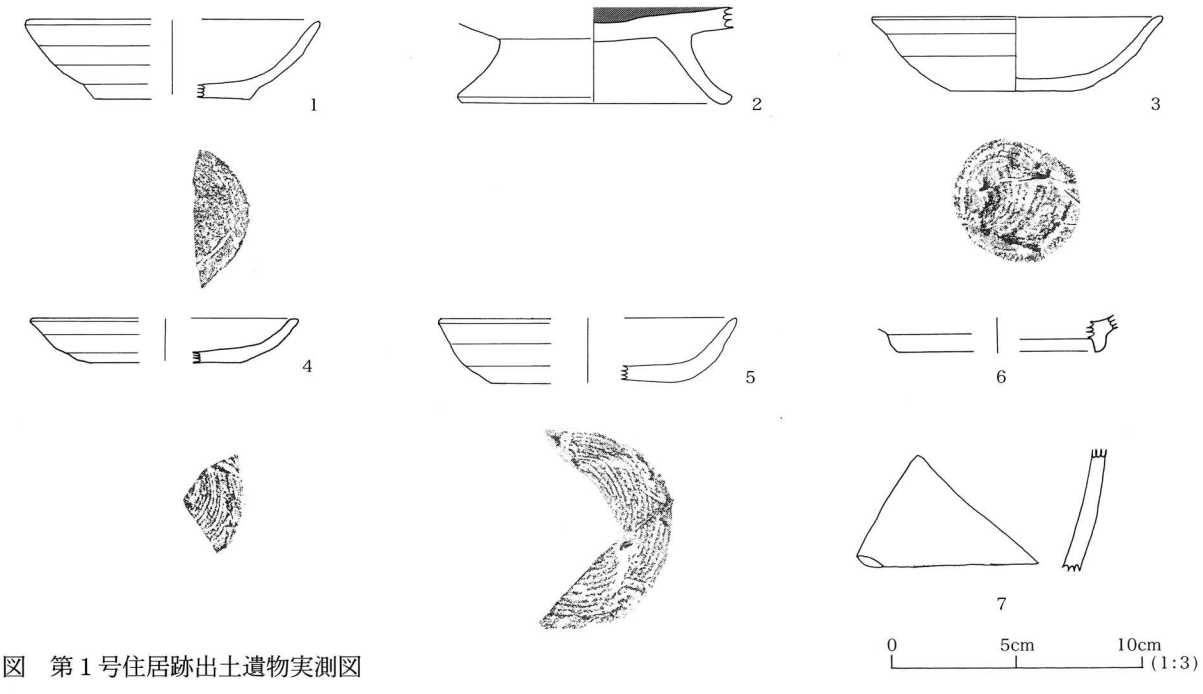
(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第５図～第６図、第２表）

規模と形状　長軸3.10m、短軸約2.8m程度の隅丸方形で、主軸方向はN－６°－Eである。ただし東部が区域外に出ているため正確な規模は確認できない。壁高は18～22cmで、外傾して立ち上がっている。



第５図　第１号住居跡実測図



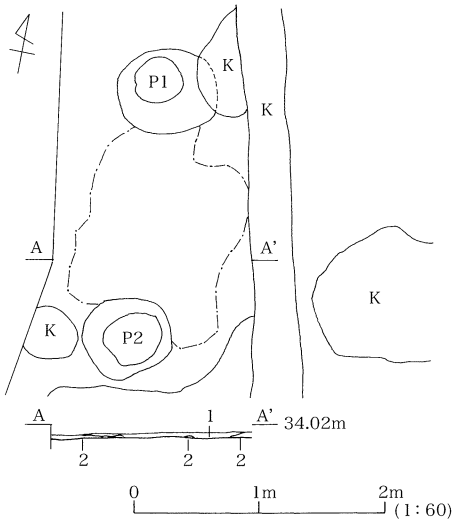
第６図　第１号住居跡出土遺物実測図

床　ほぼ平坦で踏み固められている。　**竈**　確認していない。　**柱穴**　確認していない。
覆土　５層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。
土層解説　１　暗褐色　ローム粒子少量・しまり中　　２　褐色　　ロームブロック少量
　　３　黒褐色　ローム粒子少量・しまり中　　４　褐色　　しまり弱
　　５　橙色　　ロームブロック多量・炭化物混じる・しまり弱
遺物出土状況　土師器片124点（坏類56、甕類３、その他65）、灰釉陶器２点（椀１、瓶１）が出土している。遺物は遺構全体に散在しており、いずれも細片である。１、２は10世紀後半の所産である。２点確認された灰釉陶器は愛知県みよし市の黒笹90号窯跡の産（Ｋ－90窯式）である。
所見　時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。

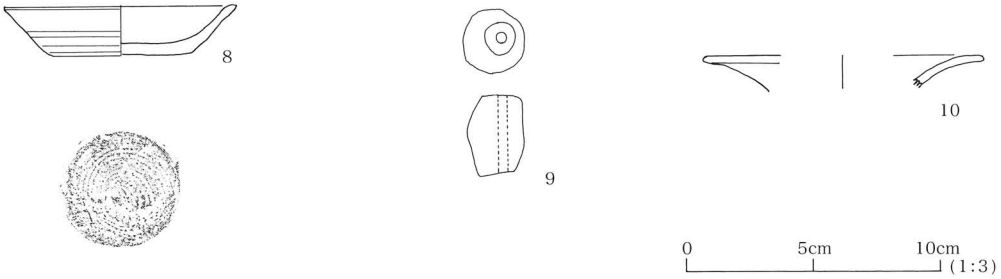
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	(11.8)	3.3	(6.0)	石英、長石、礫	橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	下層	20%
2	土師器	高台付坏	—	—	(10.8)	石英、長石	橙	良好	外面：ロクロナデ、足高・貼付高台 内面：ミガキ、黒色処理	上層	30%
3	土師器	坏	(11.8)	3.0	(4.6)	石英、長石、礫	黄橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	40%
4	土師器	小皿	(10.8)	1.9	(6.0)	石英、長石	橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	10%
5	土師器	小皿	(12.0)	2.6	(7.5)	石英、長石	にぶい黄橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	60%
6	灰釉陶器	椀	—	—	(6.8)	精良	灰白	良好	外面：施釉、貼付・三日月高台 内面：施釉（見込みを除く）	上層	5％
7	灰釉陶器	瓶	—	—	—	精良	灰白	良好	外面：施釉 内面：ロクロナデ	上層	5％

第２号住居跡（第７図～第８図、第３表）
規模と形状　西部が区域外、南部が第３号住居跡と重複、東部及び北部は撹乱を受けており、確認できない。
床　ほぼ平坦で踏み固められている。　**竈**　確認していない。
柱穴　２か所確認した。Ｐ１は深さ40cmで主柱穴と考えられる。Ｐ２は深さ18cmである。
覆土　２層確認できたが、堆積状況は不明である。
土層解説　　１　褐色　　ローム粒子少量・しまり中
　　２　明褐色　ローム粒子多量・しまり中
遺物出土状況　土師器片53点（坏類53）、須恵器（坏２）２点、土製品（管状土錘１）１点、緑釉陶器（段皿１）１点が出土している。いずれも細片である。
所見　形状等は確認できなかったが、床面の状況等から住居跡と判断した。時期は、出土土器から９世紀前半と考えられる。



第７図　第２号住居跡実測図



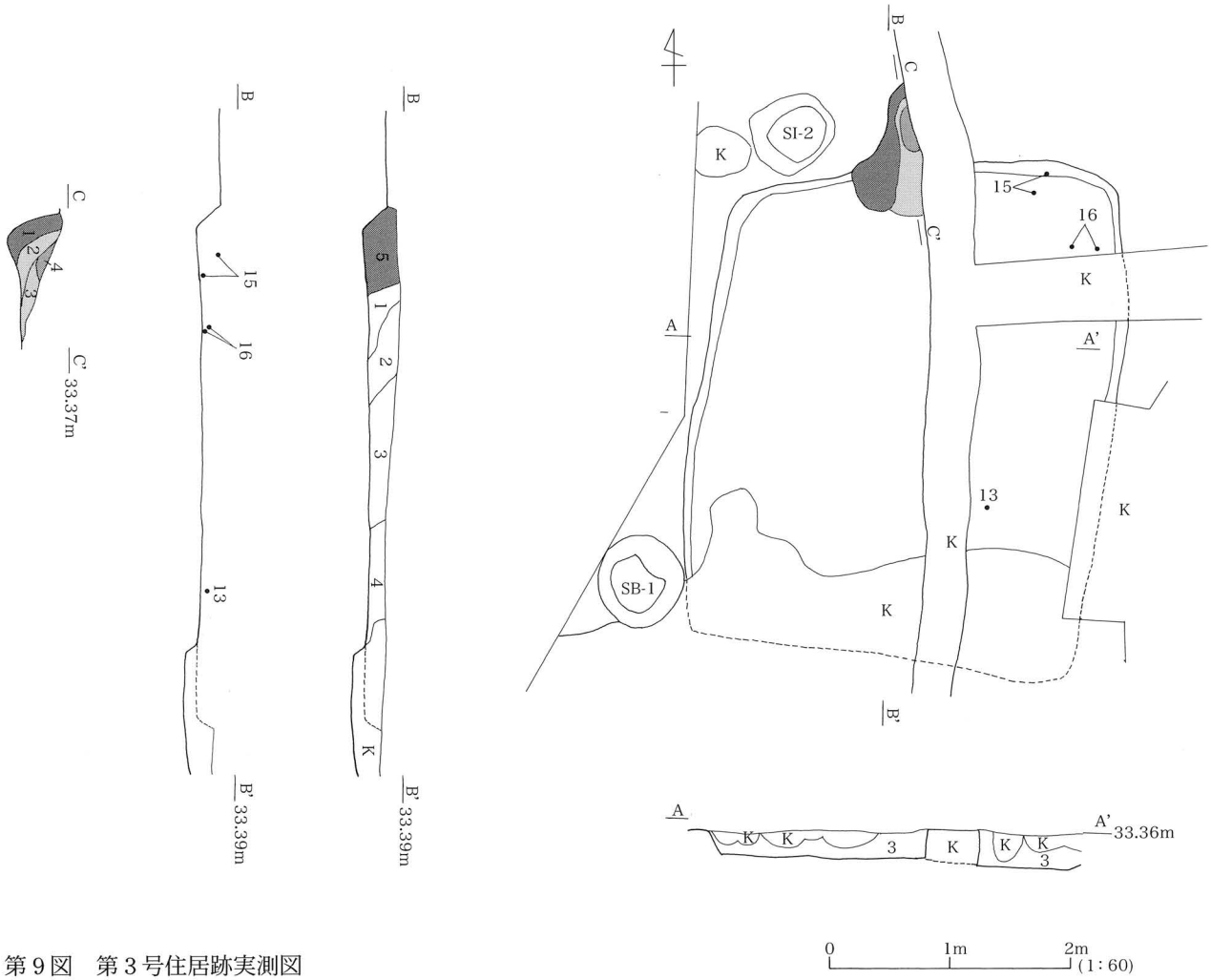
第８図　第２号住居跡出土遺物実測図

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表

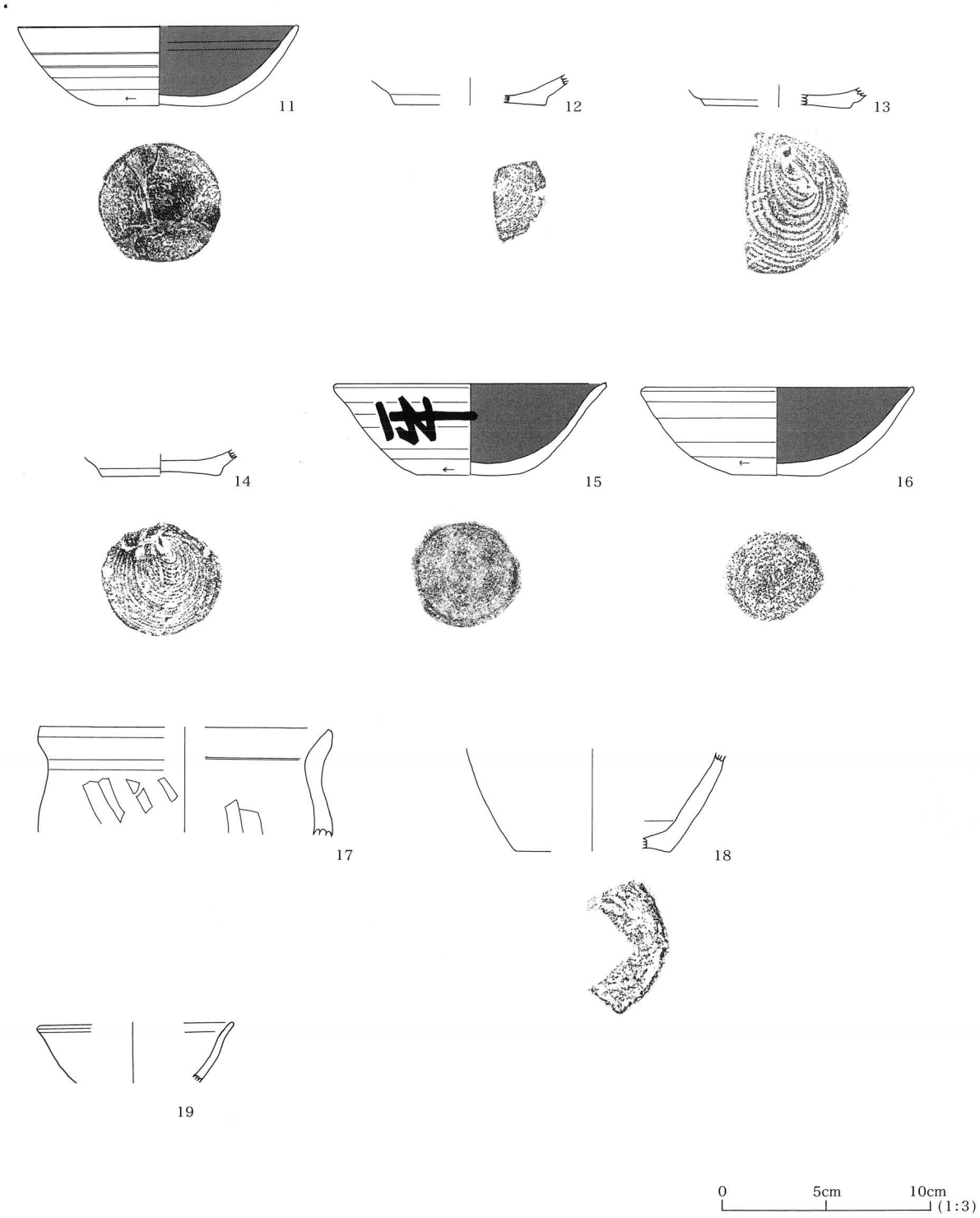
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
8	土師器	小皿	9.3	2.0	4.4	石英、長石、礫	にぶい黄橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	70%
9	土製品	管状土錘	径1.1	長さ3.1	—	石英、長石、金雲母、褐色粒子	暗褐	良好	外面：ナデ、一部平坦面	上層	100%
10	緑釉陶器	段皿	(11.2)	—	—	石英、長石	暗緑	良好	外面：施釉 内面：施釉	上層	5％

第３号住居跡（第９図～第10図、第４表）

規模と形状　長軸4.14m、短軸3.34mの隅丸方形で、主軸方向はN－２°－Eである。壁高は10～26cmで、外傾して立ち上がっている。　**床**　ほぼ平坦で踏み固められている。



第９図　第３号住居跡実測図



第10図　第３号住居跡出土遺物実測図

竈　北壁のほぼ中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙出部まで106㎝、袖部の東半分が撹乱を受けているため袖部幅は不明である。袖部は床面と同じ高さを基部として、砂質粘土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に60㎝三角形状に掘り込まれ、火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説　1　明褐色　砂質粘土・しまり中・粘性中　2　褐色　焼土多量・しまり弱
3　褐色　焼土多量・しまり弱　4　褐色　焼土多量・しまり弱

柱穴　確認していない。

覆土　４層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説　1　暗褐色　ローム粒子少量・焼土微量・しまり中
2　褐色　ローム粒子少量・しまり弱
3　褐色　ローム粒子少量・しまり弱
4　暗褐色　ローム粒子微量・しまり強　5　明褐色　砂質粘土、竈材

遺物出土状況　土師器片306点（坏類168、甕類62、その他136）、須恵器15点（坏類４、甕類11）、緑釉陶器１点（椀１）が出土している。遺物は遺構全体に散在しており、状態のよいものは竈東側に集中する。15は内黒処理された土師器坏で「平」の墨書があった。

所見　時期は、出土土器から９世紀中葉と考えられる。

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
11	土師器	坏	13.5	3.9	6.0	石英、長石、礫	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、下部・底部回転ヘラケズリ 内面：ミガキ、黒色処理	上層	100%
12	土師器	坏	—	—	(7.4)	石英、長石	にぶい黄橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	10%
13	土師器	坏	—	—	(7.0)	石英、長石、礫	にぶい黄橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	下層	5％
14	土師器	坏	—	—	(5.8)	石英、長石、礫	にぶい黄橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	10%
15	土師器	坏	13.3	4.5	4.6	石英、長石	黄橙	良好	外面：ロクロナデ、墨書「平」、下部右回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ 内面：ミガキ、黒色処理	下層	100%
16	土師器	坏	(13.2)	4.3	4.1	石英、長石、礫	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、下部右回転ヘラケズリ 内面：ミガキ、黒色処理	上層	50% 二次焼成
17	土師器	甕	(14.0)	—	—	石英、長石、礫	赤褐	良好	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面：ナデ 内面：ヨコナデ	上層	5％
18	土師器	甕	—	—	(7.5)	石英、長石、礫	赤褐	良好	外面：ナデ 内面：ナデ、輪積痕	上層	5％
19	緑釉陶器	椀	(9.6)	—	—	精良	暗緑	良好	外面：施釉 内面：施釉	上層	5％

第４号住居跡（第11図～第14図、第５表）

規模と形状　長軸約2.8m程度、主軸方向はN—18°—Eの隅丸方形と推定されるが、東部と西部が撹乱を受けているため、正確な規模と形状は確認できない。壁高は４～12㎝で、外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で踏み固められている。

竈　北壁に付設されている。規模は、焚口部から煙出部まで70㎝、袖部幅は50㎝である。袖部は床面と同じ高さを基部として、砂質粘土で構築されている。撹乱がひどく、竈材及び焼土が広く散乱している。

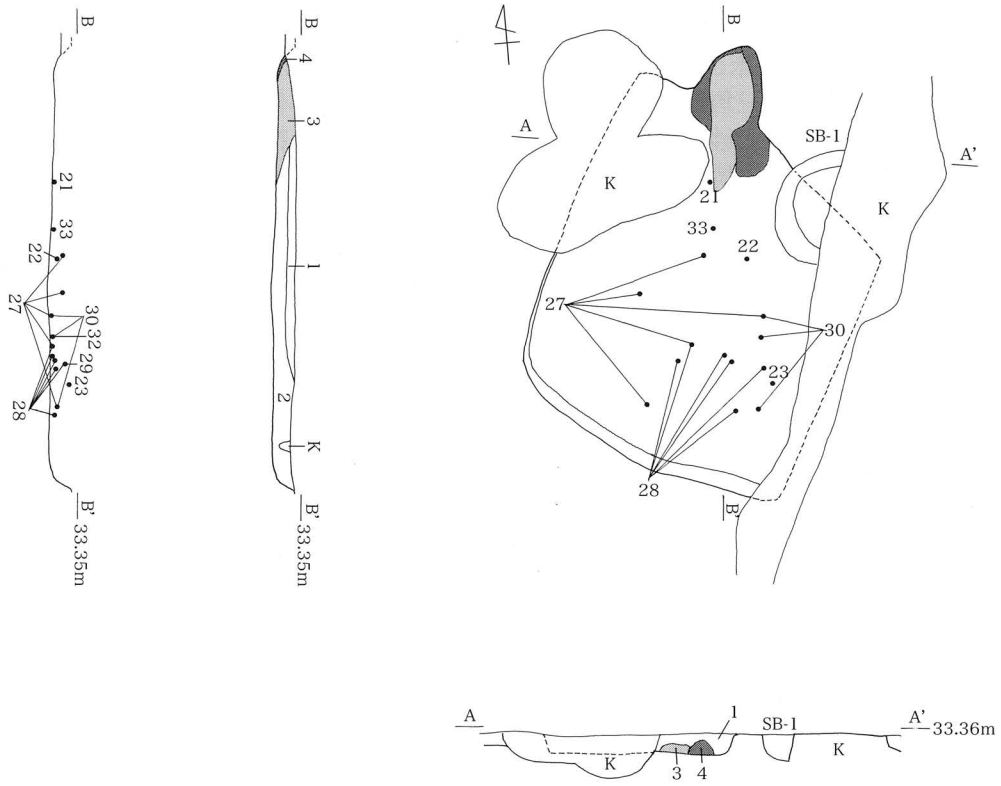
柱穴　確認していない。

覆土　４層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

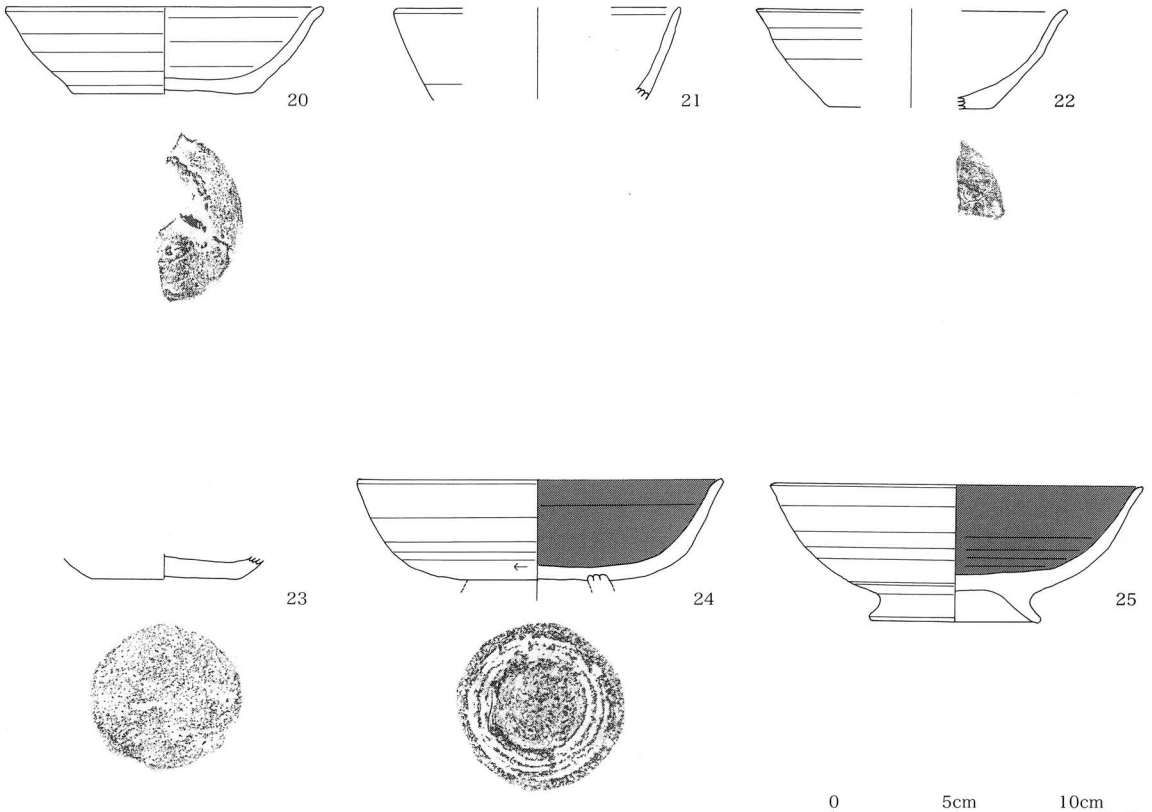
土層解説　1　暗褐色　ローム粒子少量・焼土微量・しまり中
2　褐色　ローム粒子少量・しまり弱　3　褐色　焼土多量・しまり弱
4　明褐色　砂質粘土、竈材

遺物出土状況　土師器片107点（坏類88、甕類19）、須恵器９点（甕類９）、緑釉陶器３点（椀３）、鉄製品４点、土製品２点が出土している。遺物は遺構全体に散在しており、いずれも細片である。

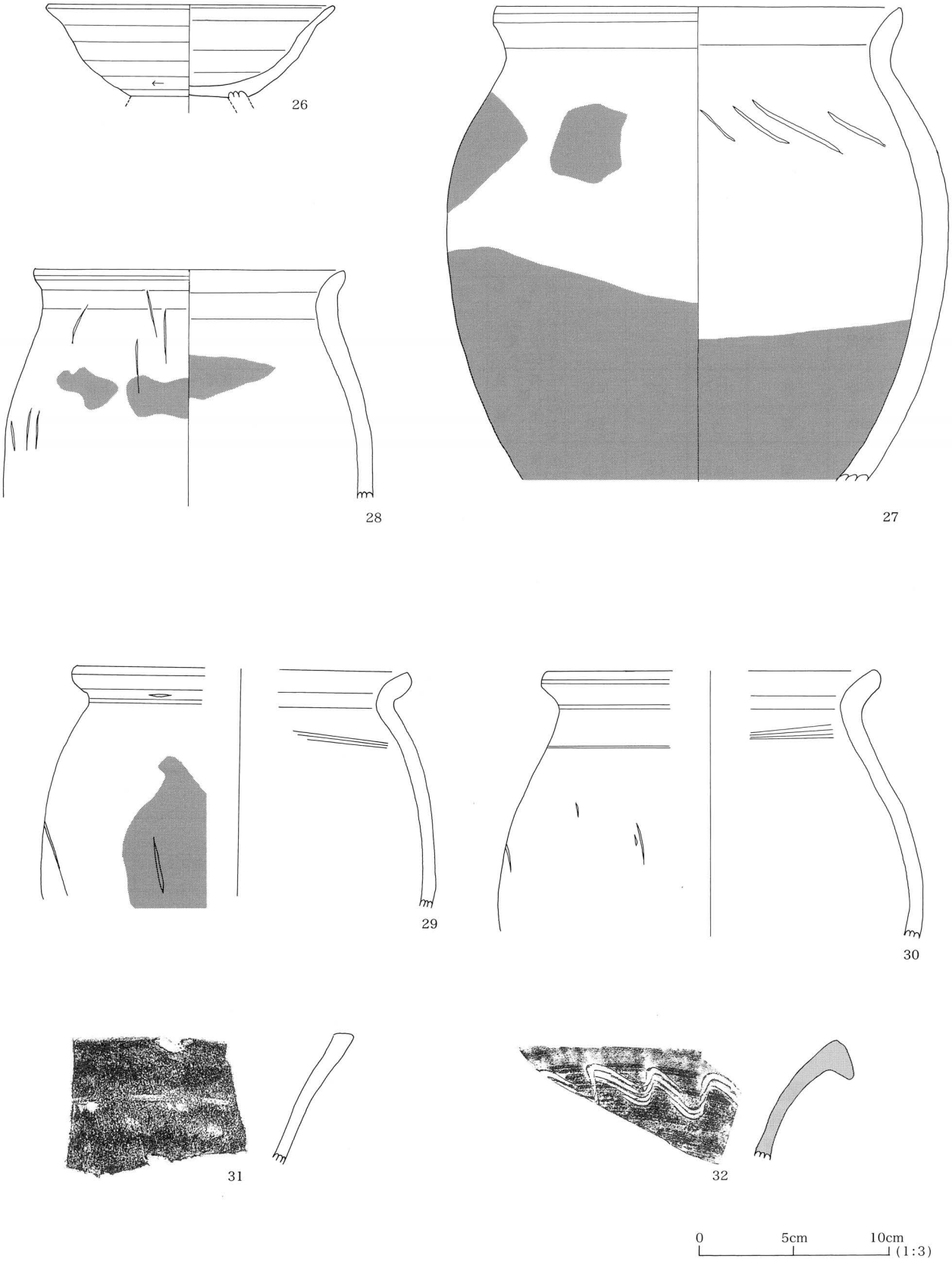
所見　時期は、出土土器から10世紀第３四半期と考えられる。



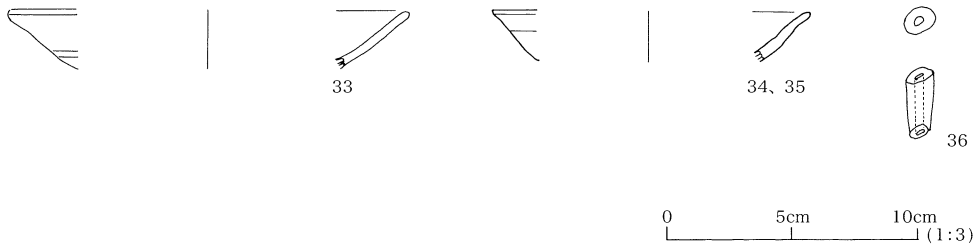
第11図　第４号住居跡実測図



第12図　第４号住居跡出土遺物実測図（１）



第13図　第４号住居跡出土遺物実測図（２）



第14図　第４号住居跡出土遺物実測図（３）

第５表　第４号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
20	土師器	坏	(12.8)	3.5	7.2	石英、長石、礫	薄黄	良好	外面：ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ	上層	20%
21	土師器	坏	(11.6)	—	—	石英、長石、雲母、礫、赤色粒子	橙	良好	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	下層	5％
22	土師器	坏	(12.5)	3.9	(6.8)	石英、長石、礫	薄黄	良好	外面：ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ロクロナデ	下層	20%
23	土師器	坏	—	—	6.0	石英、長石	橙	良好	外面：ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面：ミガキ、黒色処理	上層	10%
24	土師器	椀	(14.8)	4.0	(6.4)	石英、長石、雲母	黄橙	良好	外面：ロクロナデ、下部右回転ヘラケズリ、貼付高台（剥離） 内面：ミガキ、黒色処理	上層	60%
25	土師器	椀	(15.2)	5.5	(7.0)	石英、長石、礫	にぶい黄橙	良好	外面：ロクロナデ、貼付高台 内面：ミガキ、黒色処理	上層	70%
26	土師器	高台付坏	(15.3)	4.9	6.2	石英、長石、雲母、礫	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、下部右回転ヘラケズリ、貼付高台 内面：ロクロナデ	上層	70%
27	土師器	甕	21.4	—	—	石英、長石、礫	赤褐	良好	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面：ケズリ 内面：ナデ	下層	60%
28	土師器	甕	16.4	—	—	石英、長石、礫	赤褐	良好	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面：ケズリ 内面：ヨコナデ	下層	60%
29	土師器	甕	(18.0)	—	—	石英、長石、礫	赤褐	良好	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面：ナデ、ケズリ 内面：ナデ	上層	20%
30	土師器	甕	(18.0)	—	—	石英、長石、礫	赤褐	良好	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面：ナデ、ケズリ 内面：ヨコナデ	下層	20%
31	土師器	鉢	—	—	—	石英、長石、雲母	赤褐	良好	外面：ナデ 内面：ナデ	上層	5％
32	須恵器	大甕	—	—	—	石英、長石、雲母	灰	良好	外面：ナデ、口縁部櫛描波状文 内面：ナデ	上層	5％
33	緑釉陶器	椀	—	—	—	精良	緑	良好	外面：施釉 内面：施釉	下層	5％
34	緑釉陶器	椀	(12.8)	—	—	精良	緑	良好	外面：施釉 内面：施釉	上層	5％、35と接合
35	緑釉陶器	椀	(12.8)	—	—	精良	緑	良好	外面：施釉 内面：施釉	上層	5％、34と接合
36	土製品	管状土錘	径1.2	長さ2.8	—	石英、長石、金雲母	暗褐	良好	外面：ナデ	上層	50%

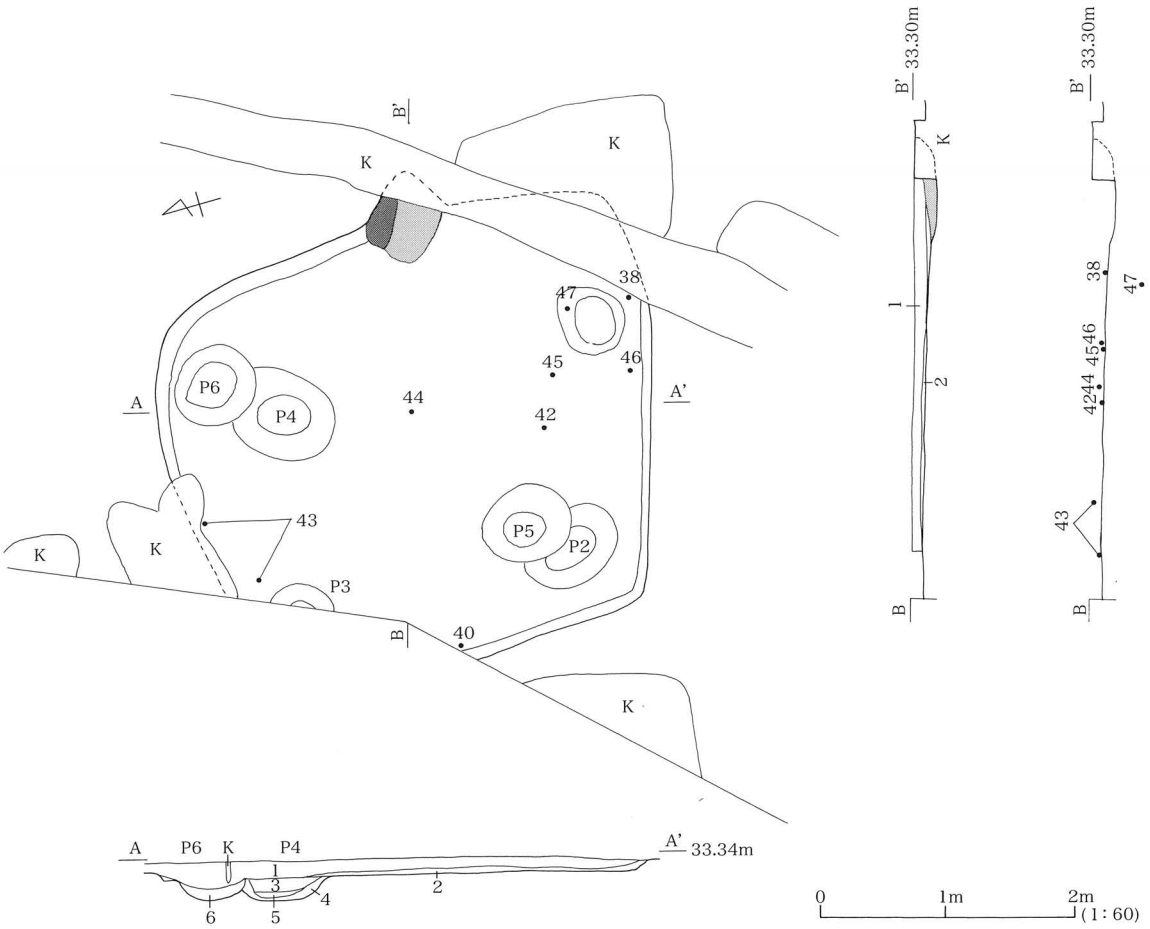
第５号住居跡（第15図～第17図、第６表）

規模と形状　長軸3.80m、短軸3.64mの隅丸方形で、主軸方向はN－13°－Eである。壁高は５～10cmで、外傾して立ち上がっている。

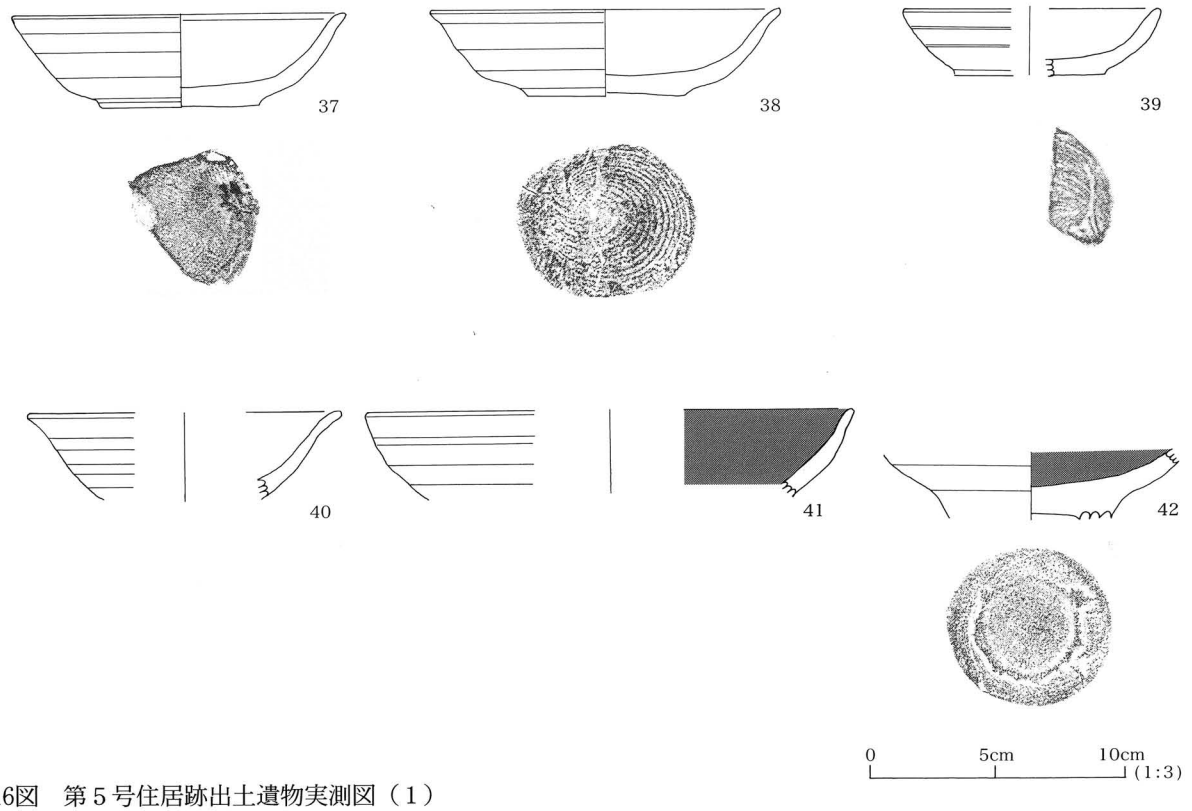
床　ほぼ平坦で踏み固められている。

竈　東壁に付設されている。大きく撹乱されており焼土の散乱が見られる。

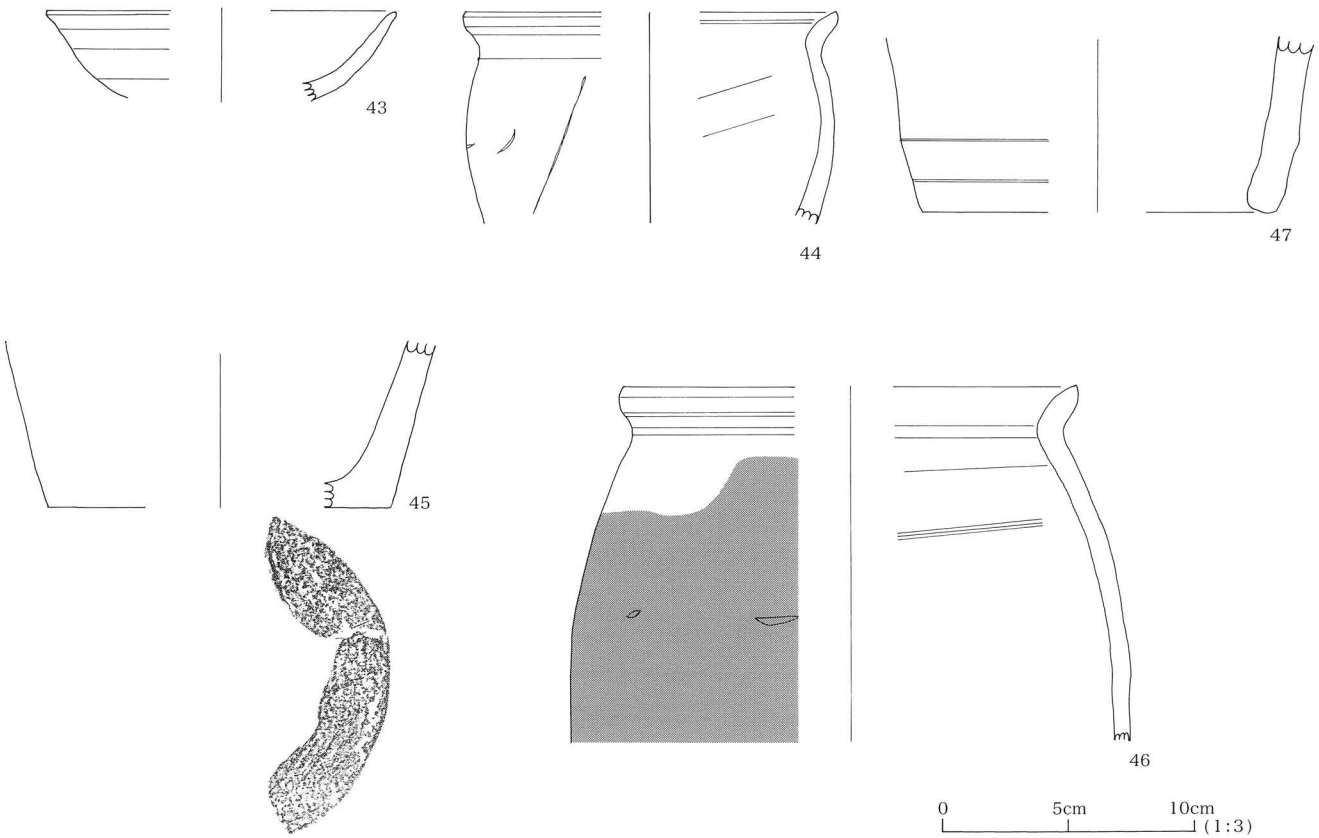
柱穴　６か所確認した。Ｐ１～Ｐ４は深さ22～46cmで主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ15cmでＰ２から、Ｐ６は深さ40cmでＰ４からの、それぞれ建て替えと考えられる。



第15図　第５号住居跡実測図



第16図　第５号住居跡出土遺物実測図（１）



第17図　第５号住居跡出土遺物実測図（２）

覆土　６層確認でき、自然堆積である。

土層解説　１　暗褐色　ローム粒子少量・焼土微量・しまり弱
２　黒褐色　ローム粒子少量・しまり中　３　褐色　ローム粒子中量・しまり中
４　褐色　ローム粒子中量・しまり中　５　褐色　ローム粒子中量・しまり中
６　褐色　ローム粒子中量・しまり中

遺物出土状況　土師器片244点（坏類56、甕類18、その他170）、須恵器３点（坏類２、甕類１）、鉄製品２点、土製品３点が出土している。遺物は遺構全体に散在しており、いずれも細片である。

所見　時期は、出土土器から11世紀第１四半期と考えられる。

第６表　第５号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
37	土師器	坏	(13.4)	3.7	(6.3)	石英、長石	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	40%
38	土師器	坏	(14.0)	3.5	6.2	石英、長石、雲母、礫	橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	下層	60%
39	土師器	坏	(10.2)	2.7	(5.7)	石英、長石、礫	黄橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	40%
40	土師器	坏	(12.6)	—	—	石英、長石	赤褐	良好	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	上層	10%
41	土師器	坏	(19.7)	—	—	石英、長石	にぶい黄橙	良好	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ、黒色処理	上層	10%
42	土師器	高台付坏	—	—	6.4	石英、長石、礫	橙	良好	外面：ロクロナデ、黒斑、貼付高台 内面：ミガキ、黒色処理	下層	20%
43	土師器	坏	(13.9)	—	—	石英、長石、雲母、礫	赤褐	良好	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	下層	10%
44	土師器	甕	(14.7)	—	—	石英、長石、礫	黒褐	良好	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面：ナデ 内面：ナデ	上層	10%
45	土師器	甕	—	—	(13.8)	石英、長石、礫	赤褐	良好	外面：ナデ 内面：ナデ	下層	５％、SI5(P4)と接合
46	土師器	甕	(22.8)	—	—	石英、長石	赤褐	普通	外面：ナデ、肩部にハケ状工具痕、下部ケズリ 内面：ナデ	下層	20%
47	土師器	甑	—	—	(14.0)	石英、長石、礫	黒褐	良好	外面：ナデ、下部ケズリ 内面：ナデ	柱穴	５％

第６号住居跡（第18図～第19図、第７表）

規模と形状　北西端の角は隅丸と確認できただけで、規模と形状は不明である。西壁の方向はＮ－７°－Ｅである。壁高は４㎝で、外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で踏み固められている。　**竈**　確認していない。

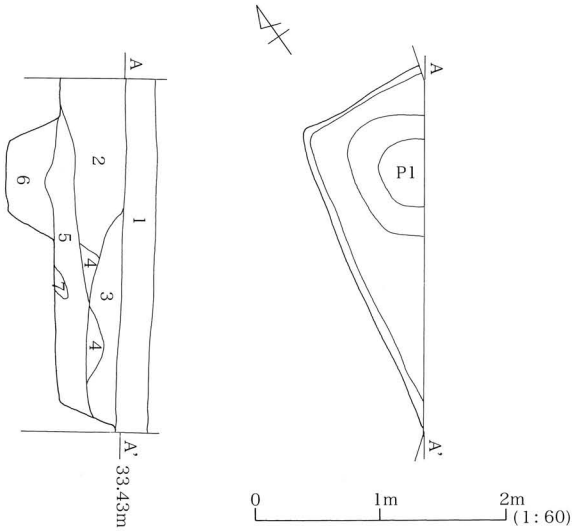
柱穴　１か所確認した。Ｐ1は深さ68㎝である。

覆土　７層からなる。不規則な堆積状況を呈しており、人為堆積と考えられる。

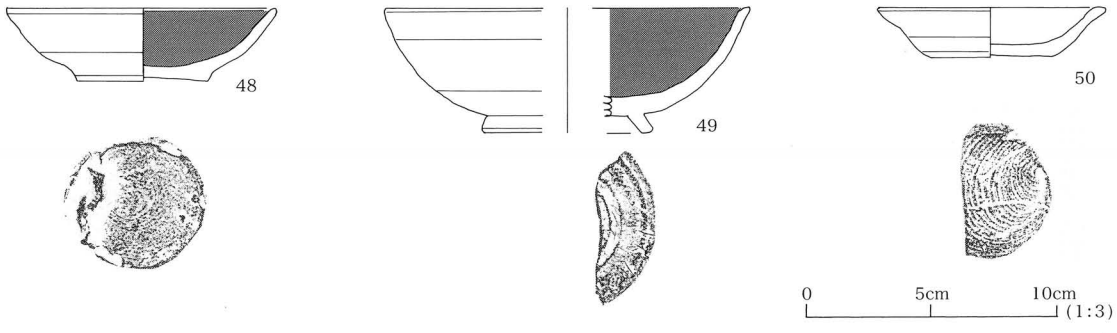
土層解説　1　極暗褐色　耕作土　　2　暗褐色　　ローム粒子微量・しまり弱
3　暗褐色　ローム粒子微量・しまり弱
4　褐色　　ローム大ブロック多量・しまり中
5　褐色　　ローム大ブロック多量・しまり中
6　褐色　　ローム小ブロック多量・しまり中
7　黒褐色　ローム粒子少量・しまり弱

遺物出土状況　土師器片168点（坏類66、甕類24、その他78）、須恵器４点（甕類４）が出土している。遺物はいずれも細片である。

所見　時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第18図　第６号住居跡実測図



第19図　第６号住居跡出土遺物実測図

第７表　第６号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
48	土師器	坏	(10.9)	2.9	(5.0)	石英、長石、礫	にぶい赤褐	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ミガキ、黒色処理	上層	60%
49	土師器	高台付坏	(14.8)	5.0	(7.0)	石英、長石、礫	赤褐	良好	外面：ミガキ、黒斑、貼付高台 内面：ミガキ、黒色処理	上層	30%
50	土師器	小皿	(9.2)	2.0	(5.0)	石英、長石、礫	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	70%

(2)　土坑

第17号土坑（第20図～第22図、第８表）

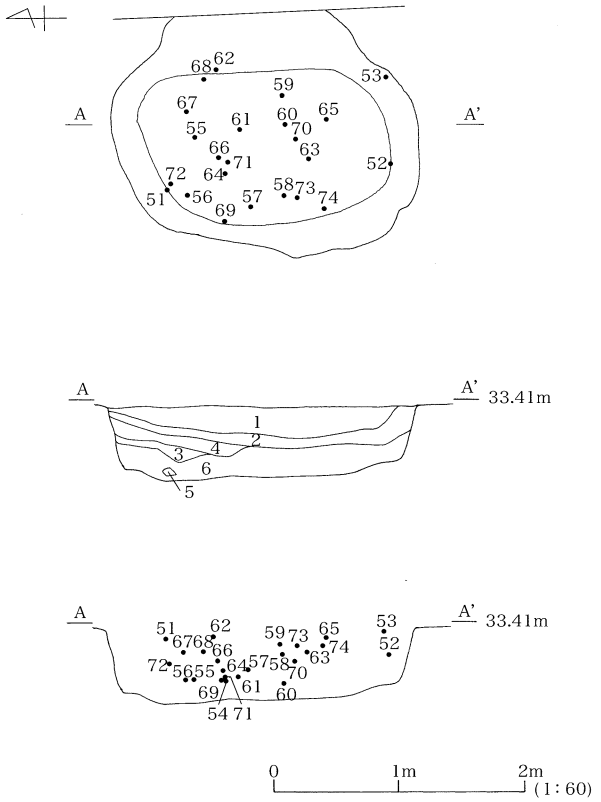
規模と形状　平面は長軸250㎝、短軸156㎝の楕円形を呈し、長軸方向はN―12°―Wである。深さは69㎝で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　６層からなる。火を用いた形跡がある２層以下は人為堆積と考えられるが、１層は不明である。

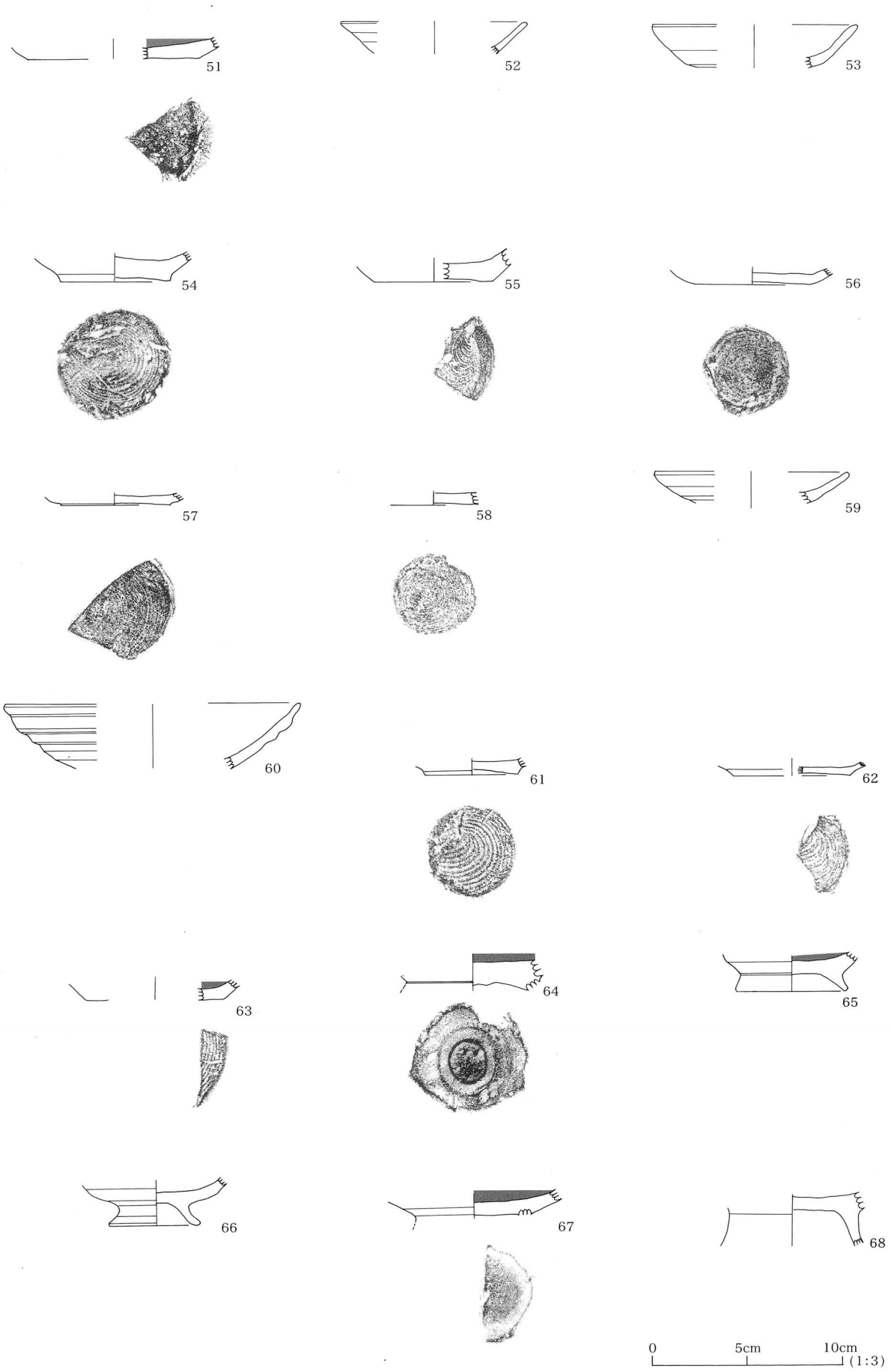
土層解説　1　黒褐色　ローム粒子微量・しまり弱
2　褐色　焼土多量・炭化物少量・ローム粒子微量・しまり弱、人為堆積
3　褐色　焼土多量・炭化物少量・ローム粒子微量・しまり弱、人為堆積
4　暗褐色　ローム小ブロック中量・しまり中、人為堆積
5　明褐色　ローム大ブロック、人為堆積
6　暗褐色　ローム小ブロック中量・しまり中、人為堆積

遺物出土状況　土師器片256点（坏類254、甕類２）、須恵器５点（甕類５）、鉄製品４点、石製品２点、土製品１点が出土している。遺物はいずれも細片であるが、土師器坏類の底部が多い点が特徴的である。

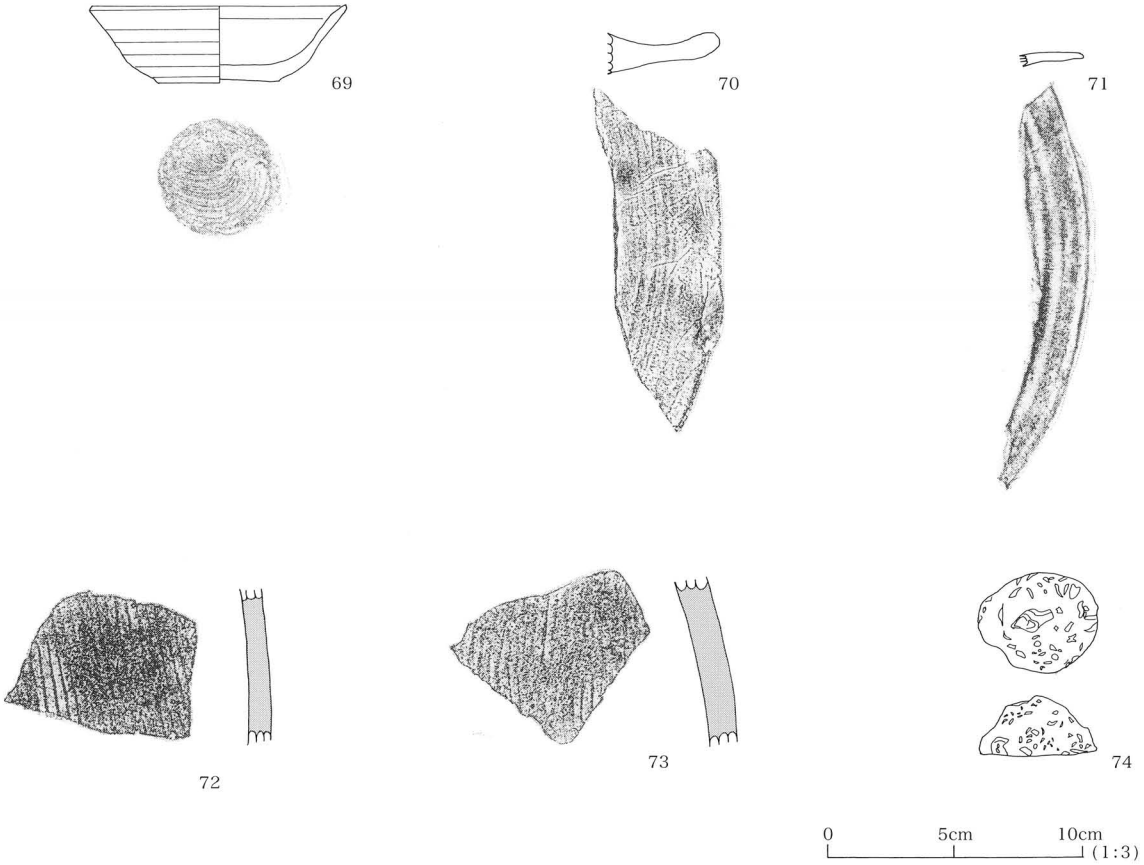
所見　焼土の層があることから儀式的な目的を想起させるが、性格は不明である。時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第20図　第17号土坑実測図



第21図　第17号土坑出土遺物実測図（1）



第22図　第17号土坑出土遺物実測図（２）

第８表　第17号土坑出土遺物観察表

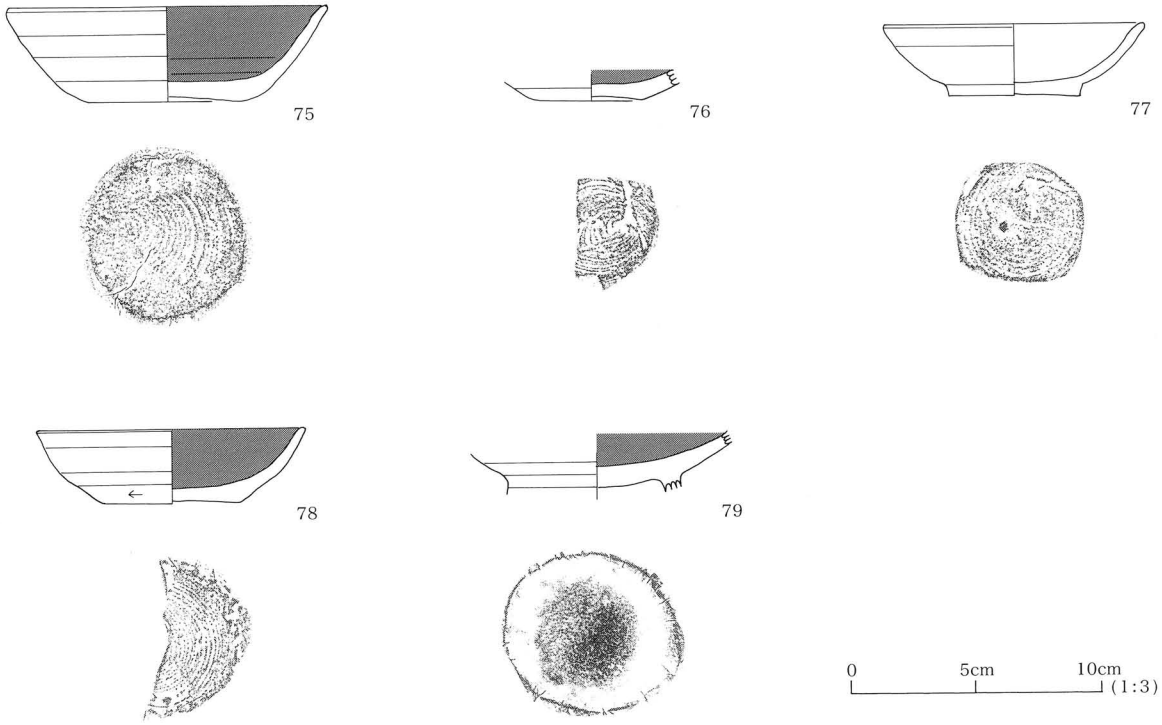
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
51	土師器	坏	—	—	(9.4)	石英、長石、礫	橙	良好	内面：ミガキ、黒色処理	上層	5％
52	土師器	坏	(10.0)	—	—	石英、長石、礫	橙	良好	外面：ロクロナデ、黒斑 内面：ロクロナデ	中層	5％
53	土師器	坏	(11.0)	—	—	石英、長石、礫	橙	良好	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	上層	10%
54	土師器	坏	—	—	5.9	石英、長石、礫	にぶい赤褐	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	下層	30%
55	土師器	坏	—	—	(6.4)	石英、長石	にぶい橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	中層	10%
56	土師器	坏	—	—	6.0	石英、長石、礫	褐	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	中層	30%
57	土師器	坏	—	—	(5.8)	石英、長石、礫	橙	良好	外面：底部糸切 内面：ロクロナデ	下層	20%
58	土師器	坏	—	—	4.6	石英、長石、礫	淡橙	良好	外面：底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	20%
59	土師器	坏	(10.4)	—	—	石英、長石、雲母、礫	橙	良好	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	上層	10%
60	土師器	坏	(16.0)	—	—	石英、長石、雲母、礫	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、下部回転ヘラケズリ 内面：ミガキ	下層	30%、二次焼成
61	土師器	坏	—	—	(5.0)	石英、長石、雲母、礫	淡橙	良好	外面：底部糸切 内面：ロクロナデ	下層	10%
62	土師器	坏	—	—	(6.0)	石英、長石、雲母、礫	黒褐	普通	外面:ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	10%
63	土師器	坏	—	—	(7.4)	石英、長石、礫	橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ミガキ、黒色処理	上層	5％
64	土師器	高台付鉢	—	—	—	石英、長石、礫	橙	良好	外面：ロクロナデ、貼付高台 内面：ミガキ、黒色処理	中層	5％
65	土師器	高台付坏	—	—	5.8	石英、長石、雲母、礫	黄橙	良好	外面：ロクロナデ、貼付高台 内面：ミガキ、黒色処理	上層	20%
66	土師器	高台付坏	—	—	5.0	石英、長石、礫	黄橙	良好	外面：ロクロナデ、黒斑、貼付高台 内面：ロクロナデ	中層	30%
67	土師器	高台付坏	—	—	6.3	石英、長石、雲母	にぶい橙	良好	外面：ロクロナデ、貼付高台 内面：ミガキ、黒色処理	中層	20%
68	土師器	高台付坏	—	—	6.8	石英、長石、雲母	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、足高の貼付高台 内面：ロクロナデ	上層	5％

69	土師器	小皿	10.3	3.1	4.8	石英、長石、雲母、礫	にぶい黄橙	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	上層	80%
70	土師器	羽釜	—	—	—	石英、長石、雲母、礫	橙	良好	外面：ヨコナデ、木葉痕	下層	5％
71	土師器	羽釜	—	—	—	石英、長石、雲母	黄橙	良好	外面：ヨコナデ	中層	5％
72	須恵器	甕	—	—	—	石英、長石、雲母、白色針状物質	オリーブ灰	良好	外面：タタキ 内面：当具痕	中層	5％
73	須恵器	甕	—	—	—	石英、長石、雲母、白色針状物質	オリーブ灰	良好	外面：タタキ 内面：当具痕	中層	5％
74	石製品	砥石	長軸4.7	短軸4.0	高さ2.4	軽石	灰白	—	—	上層	

(3) 遺構外出土遺物（**第23図、第９表**）

調査区内より出土した平安時代の遺物について、主だったものを記載する。

75は試掘調査時に№.４トレンチで検出したものである。内面に漆及び赤色顔料が付着している。



第23図　遺構外出土遺物実測図

第９表　遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置	備考
75	土師器	坏	13.0	3.7	6.4	石英、長石、礫	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、黒斑、下部ヘラケズリ、底部糸切のち手持ちヘラケズリ 内面：ミガキ、黒色処理	№.4トレンチ	100%内面に漆と赤色顔料付着
76	土師器	坏	—	—	4.1	石英、長石、礫	にぶい黄褐	良好	外面：ロクロナデ、黒斑、底部糸切 内面：ミガキ、黒色処理	撹乱	20%
77	土師器	坏	10.6	2.9	5.3	石英、長石、礫	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、底部糸切 内面：ロクロナデ	撹乱	70%
78	土師器	坏	(10.8)	3.0	5.4	石英、長石、雲母、礫	赤褐	良好	外面：ロクロナデ、黒斑、底部糸切 内面：ミガキ、黒色処理	撹乱	50%
79	土師器	高台付坏	—	—	7.2	石英、長石	にぶい黄褐	良好	外面：ロクロナデ、貼付高台 内面：ミガキ、黒色処理	撹乱	20%

2　中世の遺構

掘立柱建物跡１棟を確認した。以下、確認された遺構の特徴について記述する。

(1)　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第24図）

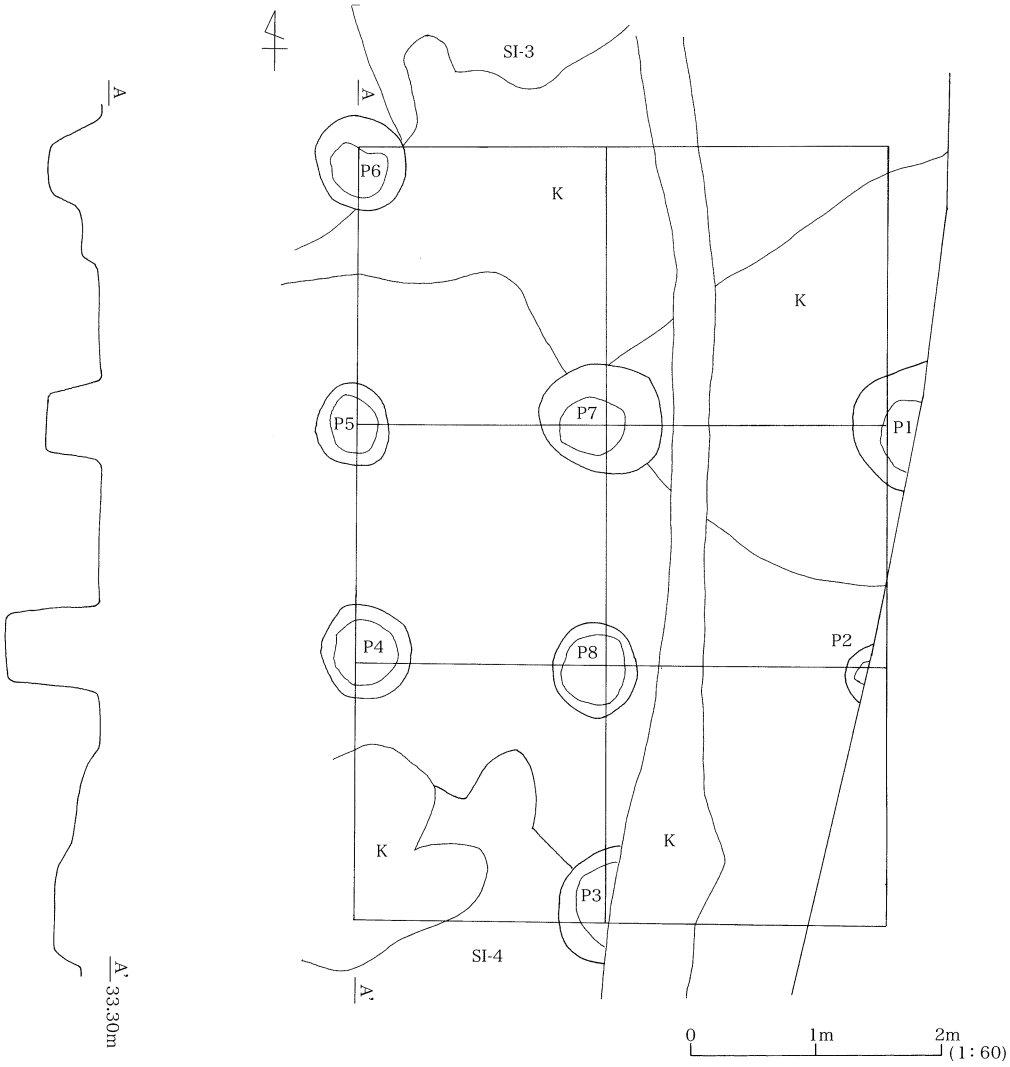
重複関係　第４号住居跡を掘り込んでいる。

規模と構造　確認された桁行は３間、梁行は２間で、総柱建物跡と考えられるが、東部が調査区域外であるため、さらに延びる可能性はある。桁行方向をN－11°－Wとする南北棟で、確認された規模は桁行7.00m、梁行4.40mである。柱間寸法は桁行が2.30m、梁行が2.20mを基調としており、面積は30.8㎡である。柱筋は概ねとおっている。

柱穴　８か所確認した。北側、北東側、南西側の３か所の柱穴は撹乱されており、南東側の１か所は区域外になる。Ｐ１～Ｐ８の平面形は円形を基調とし、深さは13㎝～74㎝である。

遺物出土状況　出土していない。

所見　時期は、中世と考えられる。



第24図　第１号掘立柱建物跡実測図

3　その他の遺構

今回の調査で、時期が明確でない土坑２基を確認した。以下確認された遺構の特徴について記述する。

(1)　土坑

第15号土坑（第25図）

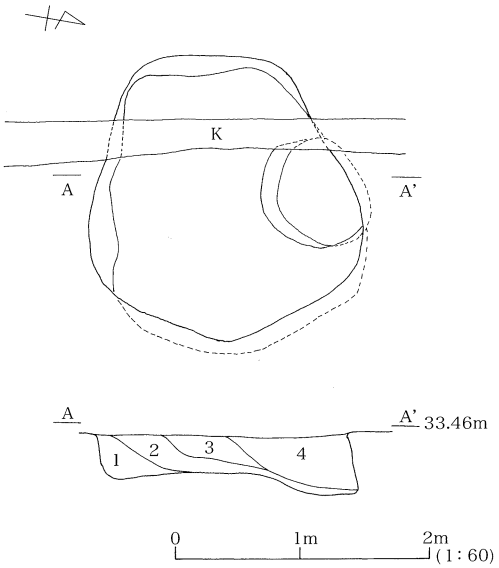
規模と形状　開口部は長軸2.40m、短軸2.20mの楕円形を呈し、長軸方向はN－83°－Wである。深さは34cmで、壁は西側から南側にかけては外傾して立ち上がっているが、北側から東側にかけては逆にオーバーハングしている。

覆土　４層からなり、南側から一方的に流れ込んだ状況から人為堆積と考えられる。

土層解説　1　明褐色　ローム粒子少量・しまり弱
2　にぶい褐色　ローム粒子少量・しまり弱
3　褐色　ローム粒子少量・しまり弱
4　褐色　ローム粒子微量・しまり弱

遺物出土状況　出土していない。

所見　時期は不明である。



第25図　第15号土坑実測図

第18号土坑（第26図）

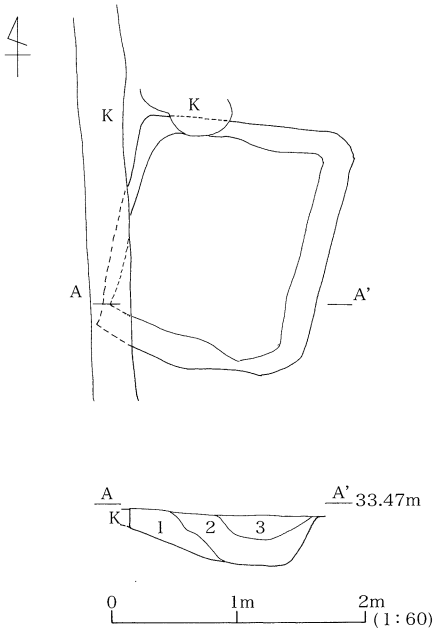
規模と形状　開口部は長軸2.04m、短軸1.68mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN－6°－Wである。深さは40cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　３層からなり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説　1　褐色　ローム粒子少量・しまり弱
2　褐色　ローム小ブロック少量・しまり弱
3　暗褐色　ローム粒子少量・しまり弱

遺物出土状況　出土していない。

所見　時期は不明である。



第26図　第18号土坑実測図

第４章　まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡１棟、土坑３基が確認された。調査面積は690㎡という限られた範囲ではあったが、多くの遺構が確認できた。以下、時代を追って遺跡の概要を述べ、まとめとする。

１　平安時代

平安時代の遺構は竪穴住居跡６軒、土坑１基が確認できた。

９世紀の住居跡が２軒、10世紀の住居跡が３軒及び土坑が１基、そして11世紀の住居跡が１軒と、今回の限られた調査範囲の中だけでも長期にわたり集落が営まれていることが窺える。また第１号住居跡から瓷器が、第２号・第３号・第４号住居跡からは緑釉陶器が、また第３号住居跡からは「平」の墨書土器が出土していることなどから、今回確認された集落は古代横瀬郷の中心的役割を担い、交流拠点となっていたと考えられる。

２　中世

中世の遺構は掘立柱建物跡１棟が確認できた。中世においても集落が営まれており、鷹巣戸内遺跡の立地環境の良さを物語っている。

３　時期不明遺構について

土坑２基が時期を明確にできなかった。この２基は平安時代の第17号土坑と40㎝～100㎝の距離に位置するため関連性も考えたが、多量の遺物が出土した第17号土坑に対してこの２基は全く遺物を含まないこと、また掘り方が明らかに異なることなどから、両者は関連しないものと結論付け、時期不明と判断した。

４　まとめ

鷹巣戸内遺跡の所在する常陸大宮市鷹巣地区における古代史では、横瀬郷の鷹巣瓦窯跡群がその主役である。第２章で述べたとおり、鷹巣瓦窯跡群に隣接する鷹巣原遺跡では、過去に実施された発掘調査において、８世紀から９世紀にかけての工人集落が確認されており、10世紀に入ると衰退していったと考えられている。鷹巣原遺跡と鷹巣戸内遺跡は直線距離で約２kmしかはなれておらず、今回の調査で確認された集落の性格を考えるうえで、鷹巣原遺跡及び鷹巣瓦窯跡群との関連性をはずすことはできない。

鷹巣瓦窯跡群で製作された瓦が久慈郡衙の造営に用いられたことはすでに定説になっているが、その運搬経路として有力と考えられているのは久慈川を利用した水運である。久慈郡衙のあった常陸太田市薬谷町・大里町は、鷹巣地区からは久慈川の下流域であり、数kmの陸路を挟むものの、この水運を利用したと考えるのが自然だろう。久慈川を利用する場合、久慈川の右岸河岸段丘上に位置した交流拠点である鷹巣戸内遺跡を経由することも仮説として十分考え得る。

しかしこの仮説に疑問が２点ある。１点目は、今回の調査において両遺跡を直接結びつける物証が確認されていない点である。瓦等の鷹巣瓦窯跡群を象徴する遺物は皆無であった。２点目は、両遺跡の営まれた時期の差異である。鷹巣原遺跡は８～９世紀に営まれているのに対し、今回の調査で確認された集落は９～11世紀であり、奈良時代まで遡る遺構・遺物は確認されなかった。

いずれにしても、今回のわずかな調査区域では結論を導くには至らず、今後のさらなる調査研究の累積を待ちたい。

引用・参考文献

伊藤重敏『常陸鷹巣遺跡（第１次調査）』鷹巣遺跡発掘調査会　昭和58年３月

石川義信『羽黒遺跡２　一級河川女沼川河川改修工事事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団　平成18年３月

井上義安『諏訪台遺跡』諏訪台遺跡発掘調査会　平成３年３月

井上義安、植田友次、大芦あさ子『常陸鷹巣遺跡　―第二次発掘調査報告―』鷹巣遺跡発掘調査会　昭和62年12月

井上義安ほか『富士山遺跡調査報告書Ⅰ』大宮町教育委員会　昭和54年３月

茨城大学中世史研究会ほか『館＜たて＞と宿＜しゅく＞の中世　―常陸大宮の城跡とその周辺―』常陸大宮市　平成21年10月

大宮郷土研究会『大宮の地名　―市民による旧大宮地域の地名調査の報告―』大宮郷土研究会　平成22年６月

大宮町歴史民俗資料館『大宮の考古遺物　―那珂・久慈の清流にはぐくまれた大宮町の先史・古代―』大宮町教育委員会　平成７年10月

小川和博、大渕淳志『高ノ倉遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会　平成17年３月

小川和博、大渕淳志『鷹巣原遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会　平成19年３月

小川和博、大渕淳志『上ノ宿遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会　平成20年10月

小川和博、大渕淳志『西塙遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会　平成21年９月

小川和博、大渕淳志、遠藤啓子『上ノ宿遺跡発掘調査報告書　第２次調査Ⅰ』常陸大宮市教育委員会　平成21年12月

小川和博、大渕淳志、遠藤啓子『上ノ宿遺跡発掘調査報告書　第２次調査Ⅱ』常陸大宮市教育委員会　平成21年12月

河野一也、河野眞理子『那賀城跡』常陸大宮市教育委員会　平成17年９月

鈴木素行『再葬墓と人面付土器のふしぎ』常陸大宮市歴史民俗資料館　平成21年12月

鈴木素行ほか『泉坂下遺跡の研究　人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について』鈴木素行　平成23年８月

高根信和『常陸一騎山』大宮町教育委員会　昭和49年３月

千種重樹『坪井上遺跡』坪井上遺跡発掘調査会　平成11年10月

辻弘和、原川雄二『西塙遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会　平成21年１月20日

外山泰久『常陸源氏平　―那賀郡阿波郷丈部里比定地に於ける集落跡の調査（遺構・遺物）―』水戸北部中核工業団地内埋蔵文化財発掘調査会　昭和60年３月

常陸大宮市教育委員会『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財分布地図』常陸大宮市教育委員会　平成20年３月

常陸大宮市教育委員会『常陸大宮市文化財マップ（改訂版）』常陸大宮市教育委員会　平成24年８月

三輪孝幸ほか『赤岩遺跡Ⅰ　畑地帯総合整備事業三美地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会　平成24年６月

湯原勝美、秋山泰利ほか『岡原遺跡　中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会　平成23年３月

渡邉浩実『上岩瀬富士山遺跡　17国補道改第17-03-068-0-053号埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団　平成18年３月

報告書抄録

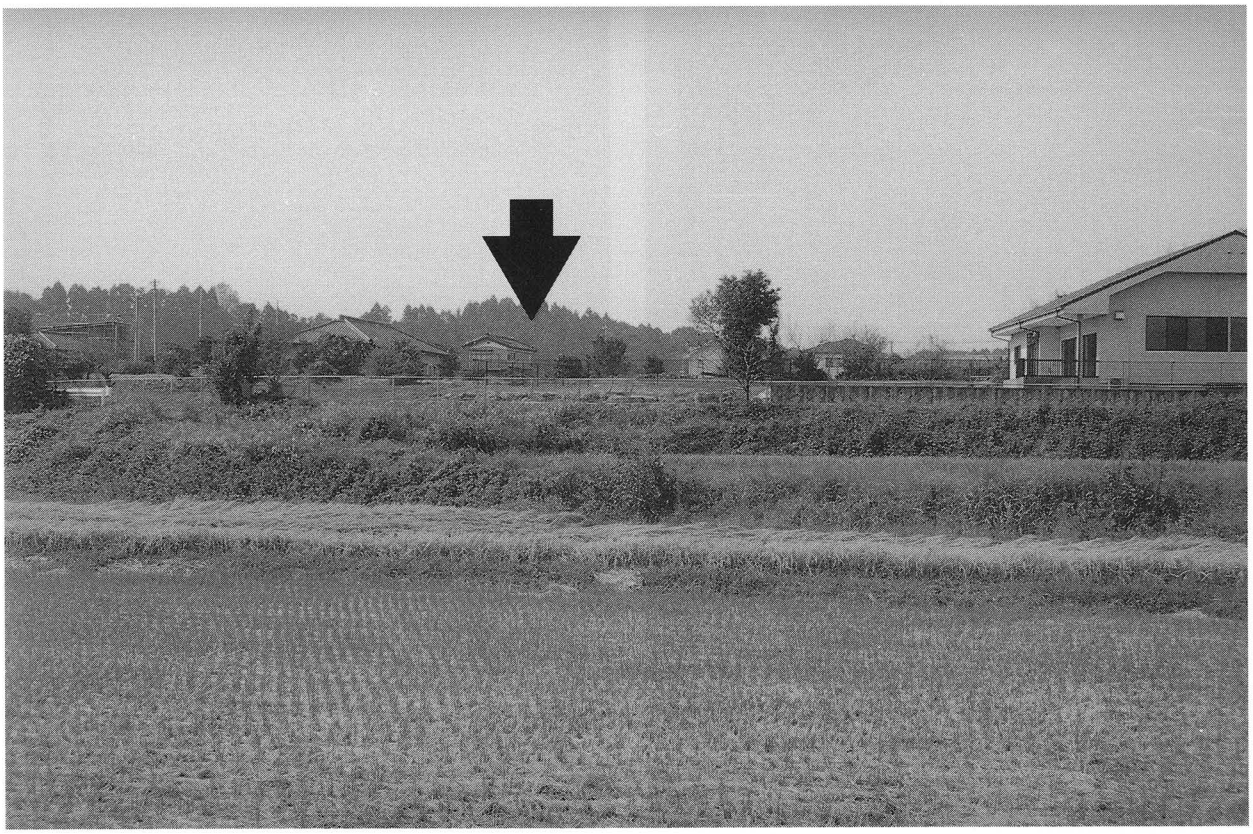
ふりがな	たかすとうちいせき
書名	鷹巣戸内遺跡
副書名	市道1418号線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	後藤俊一
編集機関	常陸大宮市教育委員会
所在地	〒319-2292　茨城県常陸大宮市中富町3135番地の６
発行機関	常陸大宮市教育委員会
所在地	〒319-2292　茨城県常陸大宮市中富町3135番地の６
発行年月日	西暦2013年３月22日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″		㎡	
たかすとうちいせき 鷹巣戸内遺跡	ひたちおおみやしたかす 常陸大宮市鷹巣938番地 の４　外９筆	08225	大034	36° 34′ 15″	140° 24′ 30″	20111019 ～ 20130322	690	市道1418号 線改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鷹巣戸内遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　６軒 土坑　１基	土師器（坏、高台付坏、小皿、甕、甑、羽釜）、須恵器（甕）、灰釉陶器（椀、瓶）、緑釉陶器（椀、段皿）、土製品（錘）、石製品（砥石）	
		中世	掘立柱建物跡　１棟	なし	
		不明	土坑　２基	なし	

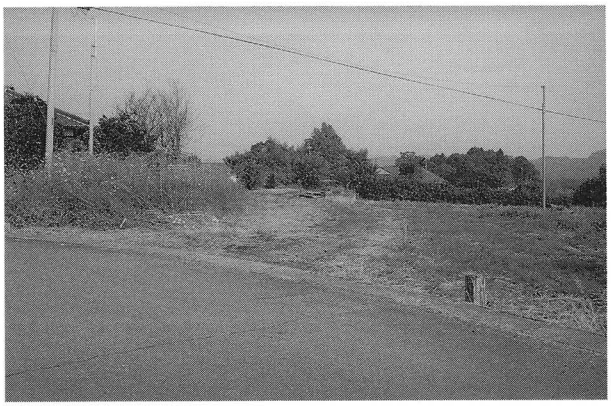
要約	平安時代から中世にかけての複合遺跡である。平安時代を中心に流通の拠点として集落が営まれたと考えられる。

写　真　図　版



鷹巣戸内遺跡調査区遠景（東から）

調査前風景調査区北側（北から）



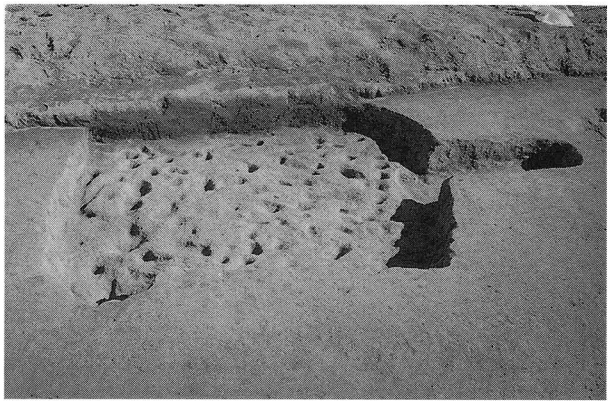
調査前風景調査区南側（南から）

作業風景

基本土層確認用試掘坑（西から）

第１号住居跡セクションA-A'（南から）

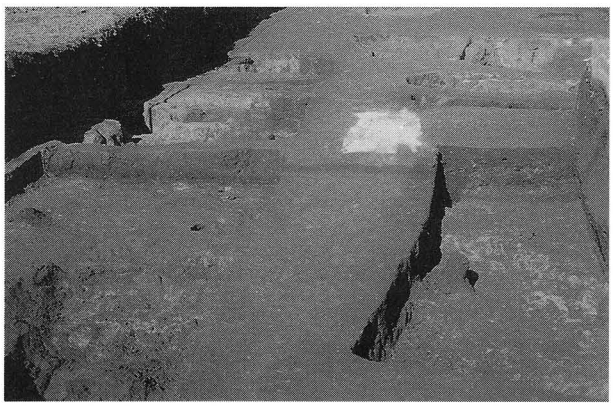
第１号住居跡セクションB-B'（西から）



第１号住居跡完掘状況（西から）

第１号住居跡完掘状況（北から）

第２号住居跡完掘状況（北から）



第３号住居跡セクションA-A'（南から）

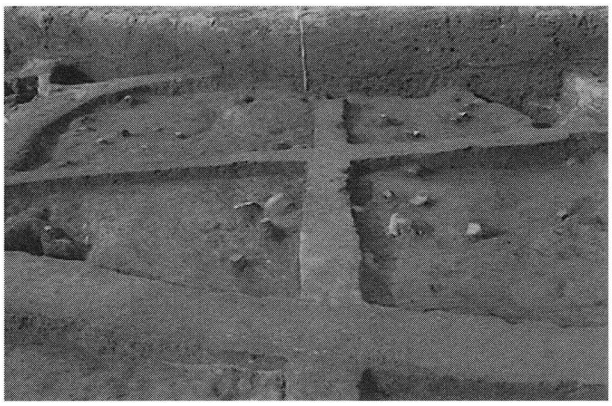
第３号住居跡遺物出土状況

第３号住居跡完掘状況（北から）

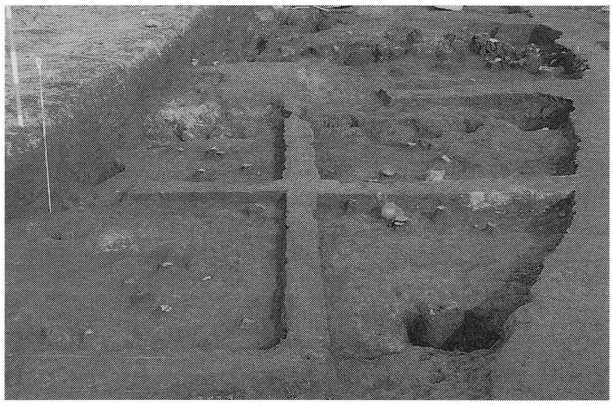
第４号住居跡遺物出土状況（東から）

第４号住居跡竈部分

第４号住居跡完掘状況（南から）



第５号住居跡セクションA-A’（東から）



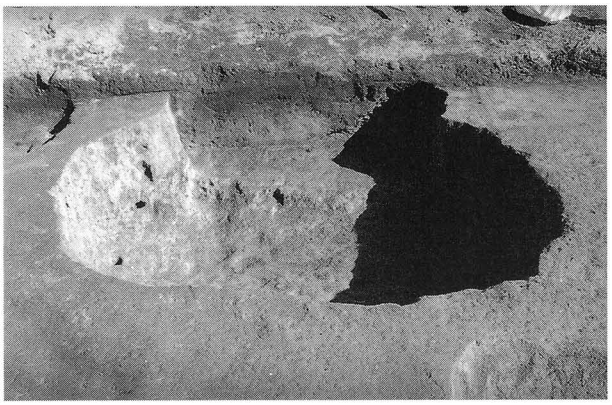
第５号住居跡セクションB-B’（南から）

第５号住居跡遺物出土状況

第５号住居跡完掘状況（東から）

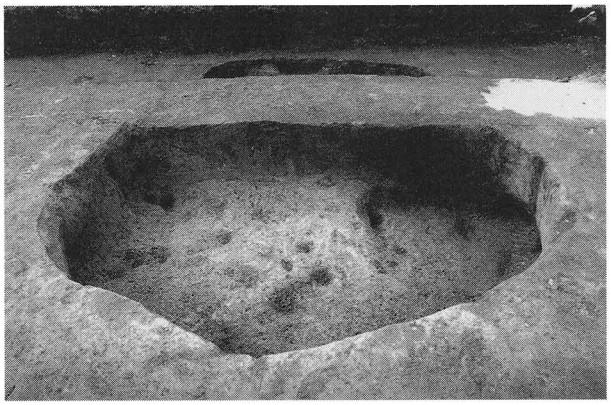
第６号住居跡完掘状況（西から）

第17号土坑遺物出土状況（東から）



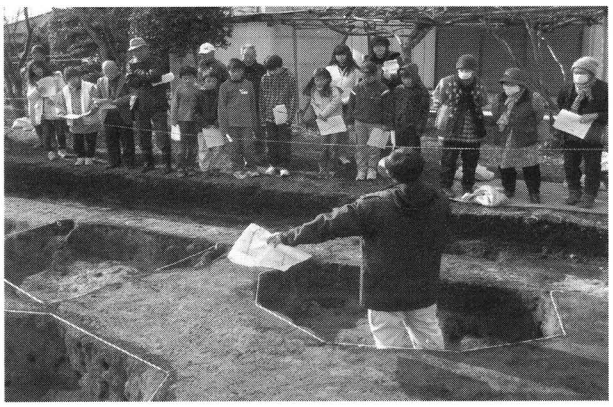
第17号土坑完掘状況（東から）

第１号掘立柱建物跡完掘状況（北から）

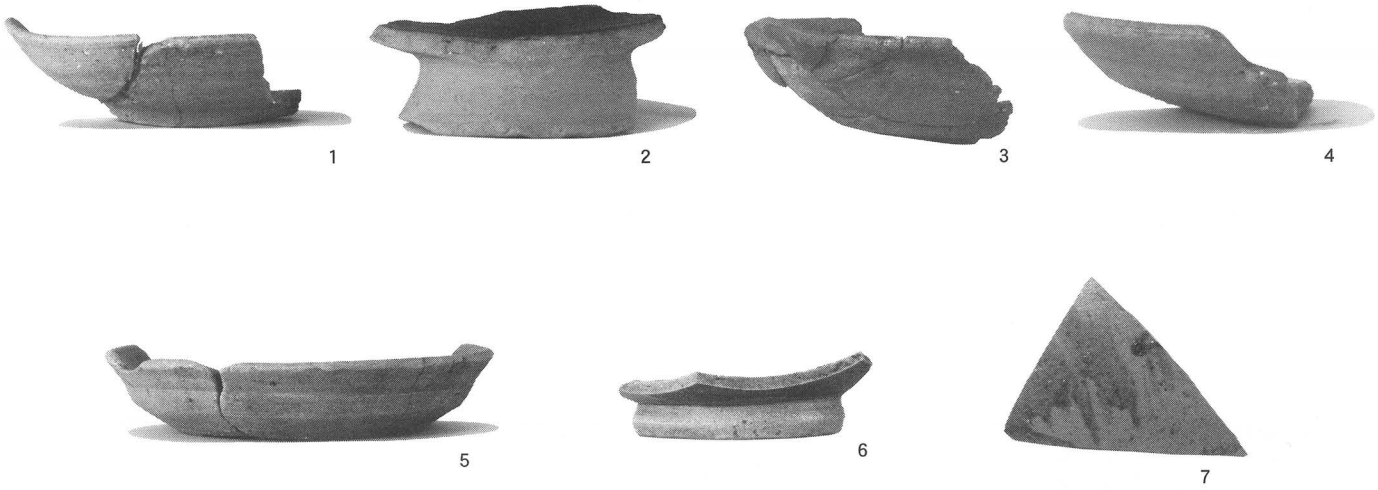


第15号土坑完掘状況（東から）

第18号土坑完掘状況（東から）



現地説明会風景

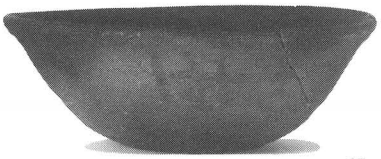


第１号住居跡出土遺物

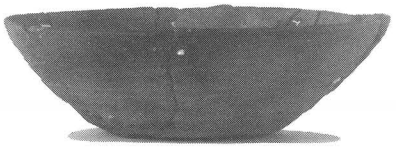
第２号住居跡出土遺物

第３号住居跡出土遺物（１）

14

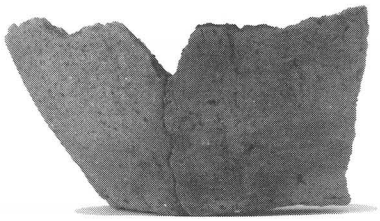


15

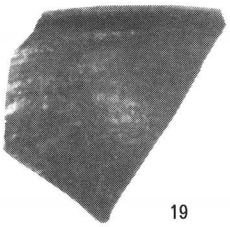


16

17



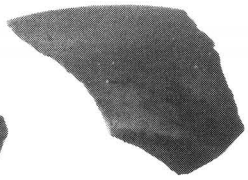
18



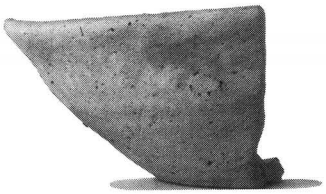
19

第３号住居跡出土遺物（２）

20

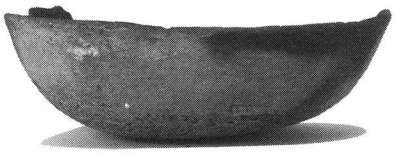


21

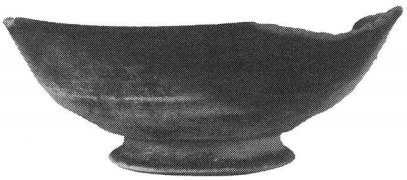


22

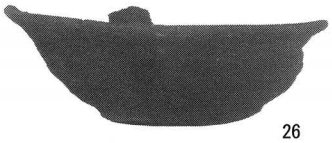
23



24

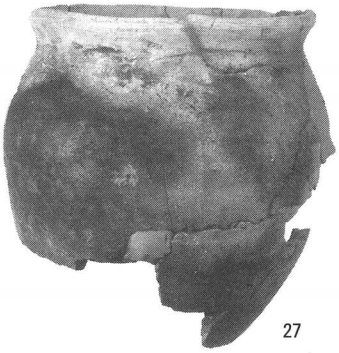


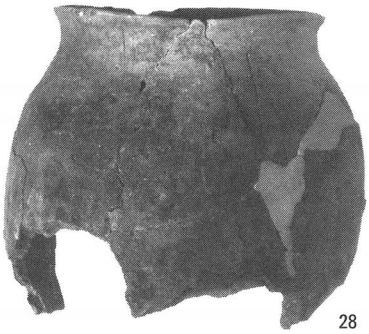
25

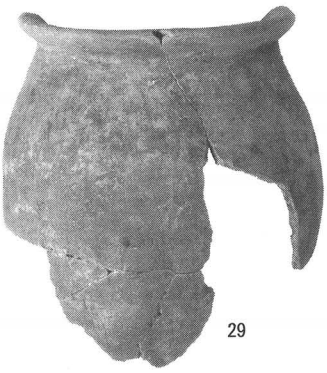


26

第４号住居跡出土遺物（１）

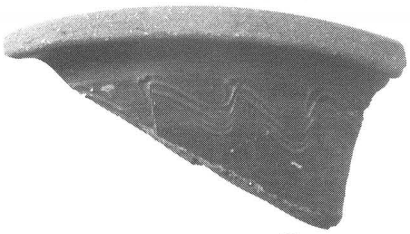

27

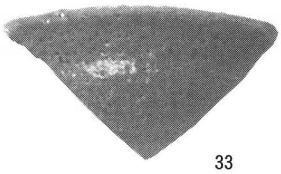

28

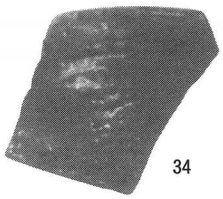

29

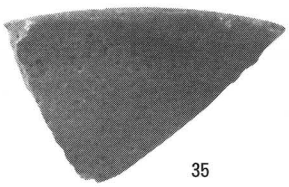
30

31


32

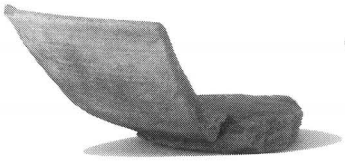

33

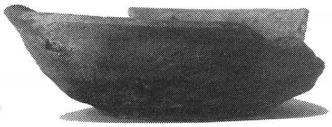

34

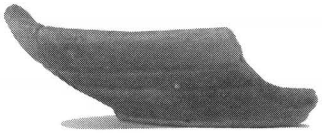

35

36

第４号住居跡出土遺物（２）

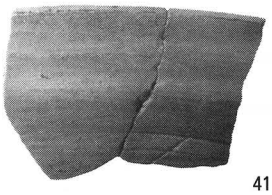

37


38


39

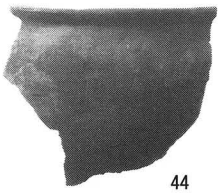
40

第５号住居跡出土遺物（１）

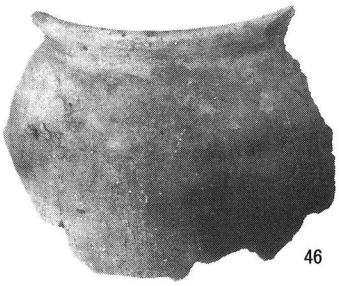

41

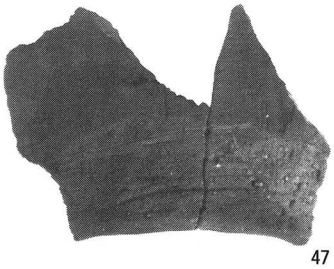
42

43

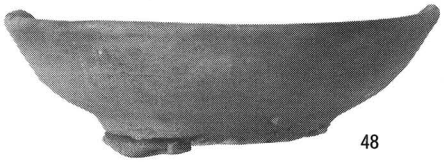

44

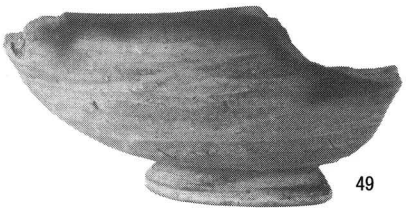
45


46


47

第５号住居跡出土遺物（２）


48

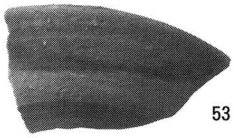

49

50

第６号住居跡出土遺物

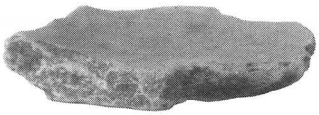
51

52


53

54

第17号土坑出土遺物（１）

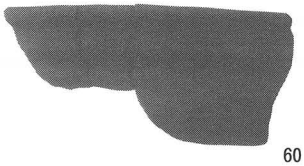

55

56

57

58

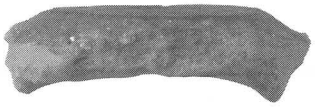
59

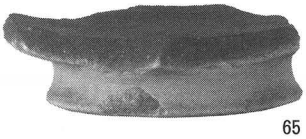

60

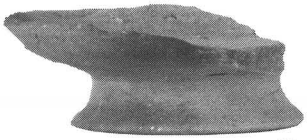
61

62

63

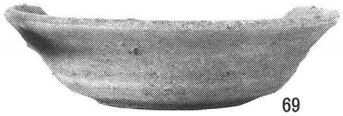

64

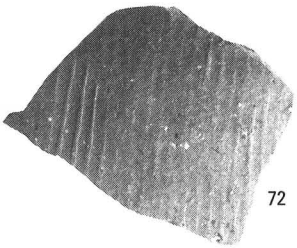

65

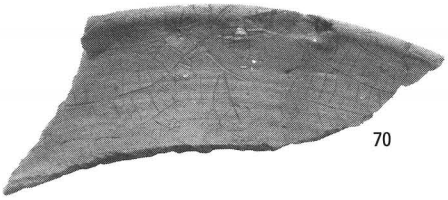

66

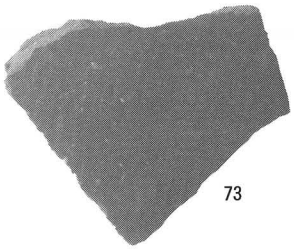
67

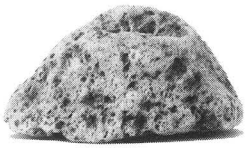
68


69


72


70


73


74

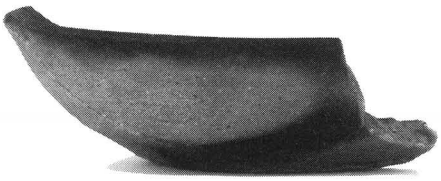
71

第17号土坑出土遺物（2）

75

76

77



78

79

遺構外出土遺物

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

鷹巣戸内遺跡

市道1418号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行日　平成25（2013）年3月22日
著　者　後藤　俊一
編集・発行　常陸大宮市教育委員会
所在地　茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6
電話番号　0295－52－1111
印　刷　コトブキ印刷株式会社